

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年四月二十五日 印刷
昭和四十四年五月一日発行 (毎月一日発行)
(第四十四号)



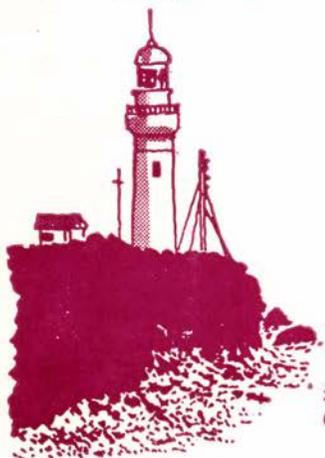
No. 44

特集・四百字詰三枚の柳論

五月号

黒潮おどる

紀州路へ



〈白浜ゆき〉 なんば発時刻

急行 きのくに5号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに10号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに6号…(土曜)…13時13分発

〈白浜・新宮ゆき〉 なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行 直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに5号は 座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

敵方にほめられ裏切り者にされ

男一匹敵のウインクにひっかかり

男ならスカッと裏切り炎えて見な

一手一手遅れて無理のない人氣

ほんとうの稔り人生の第三期

今月のことば

私には若い頃妙な癖があった。どうしてそう
なったか忘れたが、女性の半襟が気になって
仕方がなかったのである。

今ではごく特殊の場合のほか刺繍や色縮緬の
半襟は見られなくなったが、現在のネッカチ
ーフや男性のネクタイ程の魅力があったわけ
である。その妙な癖がこの頃になって変って
来た。それは女性の足もとである。

戦中戦後極めて惨めだったに比べて格段によ
くなったのが女性の足もとである。特に足袋
の白さと形の上さは心齋橋を通る際の楽しみ
が一つふえた。

一時別珍の色足袋というのが流行して心ある
男性を少からず落胆させたものであるが、こ
の頃まっ白い足袋が革草履にくい込むように
吸いついて運ばれる裾さばきは堪らなくなりズ
ミカルである。布地が上等になったのと洗剤
の改良という事もあるが女性の身嗜みが昭
和元禄に誘われているせいもある。
身嗜みと言えば昔と違って男性の無精髭も減
って小さっぱりした服装が句会などでも見ら
れるようになったのは川柳人のありかたとし
て楽しいことだ。

中島生々庵

川柳塔五月号

川柳塔五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………	中島生々庵……………	(1)
川柳塔……………	(同人作品)……………	中島生々庵選……………
		(4)
母乳論……………	河村日満……………	(2)
川柳日記……………	麻生葭乃……………	(29)
川柳初篇研究……………	(七十二)……………	(20)
	前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄	
	川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫	
秀句鑑賞……………	清水白柳……………	(26)
拌啓……………	高鷺亜鈍……………	(30)
問題でない問題……………	吉田水車……………	(44)
悪筆と川柳屏風……………	(大陸巷談)……………	東野大八……………
		(28)

私論・柳論

// 母乳論 //

五月といえば初夏。花に浮かれていた気分もこの月からぐっと引締まる。メーデーのあと三日の憲法記念日と五日のこどもの日。いわゆるゴールデンウィークということになるのだが、今年は四日が日曜日とあって人出も一層はげしいだろう。

労働歌重役室の窓閉まる 日満
という句を想い出すのもこの月である。

ところで先日内祝いがあつて嫁に行っている娘が孫を連れて帰ってきた。それまで一日一本だった牛乳の配達がこの日から二本となった。ミルクで育つ孫のためにである。朝、昼、晩と三回の孫の食事は全部又はミルクで、おやつは砂糖を少し入れたお茶である。

これでまると肥えているのだから栄養は充分なだろう。私たちの頃は、母の乳でなければ育

川柳 徳川 記……(四)……………富士野 鞍馬……(42)

きのう きょう ……本多 柳 志……(45)

四百字詰三枚の柳論……………(22)

・同人特集・

早川 清生・浜田久米雄
奴田原紅雨・橘高 薫風

服部十九氏平を偲ぶ……………藤原 秋月……(44)

近作 柳 樽……………菊沢小松園選……(32)

雅号ぶつちやげばなし……………加藤 貞山……(57)

初歩 教室……………本田恵二郎……(48)

大萬川 柳「時刻表」……………清水白柳選……(50)

★ 柳 界 展 望……………(薫風)……(52)

★ 本社 四月 句 会……………(庸佑)……(54)

★ 各 地 柳 壇……………(文秋)……(58)

「姿」……………三井 醉 夢 選……(46)

一路集 「沈黙」……………田村 藤 波 選……(46)

「団地」……………小西 雄 々 選……(47)

★ 編 集 後 記……………(二三夫)……(65)

たないように言われたものだが、
いかに科学のおかげとはいえ、ミ
ルクで育ったことも達には「英語な
ど忘れてママの守唄」の愛情を
受けとめることができるのである
うか。

地球が廻っているのだから「川
柳」も進歩しなければなるまい。
だからといってミルクで育ついま
の児のように「古川柳の味」を忘
れてしまつていいということには
なるまい。「川柳に笑いが無い」
という言葉を聞きだして相当に久
しい。

しかし最近の「川柳」には「笑
い」どころか、私には「川柳」そ
のものがミルクで育ついまのこど
も達のように、体質まで変つてし
まつていふように思われて仕方が
ないのである。

まるまるとミルクで育つのもよ
かるう。しかし私はやはり「母
乳」である「古川柳」の味を忘れ
てもらいたくないのである。

。子が出来て川の字形に寝る夫婦
。労咳へ母はおどけて叱られる

(河村 日満)



中島生々庵選

岡山県 浜田久米雄

十九平さんを悼む

春寒し明から幽の人送る
晚酌の中途日記を書いておき
お名前はしばらく話してわかり
宇宙食などは妙なめしができ
折詰に酒がつかぬは事故防止

大阪市 正本水客

捨て犬と眼があい従いてくる従いてくる
板前に注文つけて喜ばせ
お手を拝借無縁のひとを甘くみる
ぞろぞろと奢ってもらう顔になる

次男結婚

僕のえらんだ人みてもらおう子の自信

大阪市 石倉旅風

今咲いた花にはそつと春の風
雨の掌に手相を掬う山の水
わらわねばならぬところと言う笑い
赤シャツをずれたセンスのままに着て
朽ち木にも蔦がからめば生きかえり

高槻市 若柳潮花

憎いひとだけが臉のなかに住む
角帯のいたみ儲けたとも云えず
柳の芽団地も春の窓を開け
弟子と言う強味で好きなことを言う
白粉がかくせぬ皺を見る楽屋

豊中市 戸田古方

いいたいことゆうてしもうたともいわず

役人もあきんどらしい口をきき

老秃だって雪投げしてみた

どっちかといえど毒になりそうで

一刀三礼それが何んやい火の車

倉敷市 本田恵二郎

十九平さん

毒舌の矢を微笑みで折った友

相乗りで句会へ走る弥次と喜多

豪快と温さを蒔いて逝った友

芸者ワルツ踊った彼の面影よ

思い出が楽し過ぎるでなお悲し

青森市 工藤甲吉

エープリルフルではない左遷辞令

カゼ一つひかない馬鹿を羨まれ

警察もやはり金庫に鍵をかけ

彼岸から彼岸毎月前借りし

純朴をほめて都会へ連れてゆき

倉敷市 野田素身郎

黒白をつけて気まずいことになり

定年と一緒の春がうとましい

いつの間にか僕が主犯にされていた

お喋りがまた始まった熱がひき

どうにかなろうという結論で飯にする

東大阪市 久米奈良子

四十処女季節はずれの夢を見ん

イヤなこと詰めて飛ばそうゴム風船

一点を避けて永遠の恋とせん

ぬけ出した斜塔へ動悸おさまらず

見ぬかれる心かばうか春の雪

愛媛県 村上旭童

自前の酒で向っ腹しずめる気

明日も又働くいびきたてはじめ

白いのがまじり無精ひげあわて

出稼ぎの父帰る日へ布団はず

唯我独尊人生の裏知ってる気

高槻市 傍島静馬

ホステスのペースにふところ寒うなり

ばあちゃんに寒いと留守番あてがわれ

黄疽のお相伴して蜆汁

欠伸する竿を尻目に鯉はねる

新社屋竣工ノルマのしかかり

大阪市 本多柳志

いんぎん無礼思いつたコマーシャル

高いのは打たれ低いのは埋められ

マスクミに媚びマスクミに見放され
アルバムへ栄枯盛衰五十年
望みなきに非ずセールス靴を脱ぎ

小松市 馬場魚山

二つ目のマスク香港風邪と知り
くだらない料理撮せば美味そう
雪まつり雪の消えないのが値うち
一泊をするに一年掛けつづけ
女房何故死んだ布団を片づける

香川県 三井醉夢

薰風氏来る

旅人のまなざしならん暖かし

善通寺

群鳩にお遍路まじるうららかさ

栗林公園

造園の美は旅人の歩をゆるめ

屋島

落人の行方は見えぬ瀬戸の海

高松駅

名物のうどんは立ったまますすり

大阪市 後藤梅志

ふる柳気骨ばかりが身を支え

野良犬がころがして行く残飯

可能性は地上だけでもうたくさん

控訴院名物にされ啞にされ

当て字でも頓珍漢はおもしろい

大阪市 橘高薰風

桂浜で

海の風竜馬の鬚へふところへ

雨の足摺岬

紅椿墜とすや怒濤はばたけり

服部十九平氏葬儀の時刻に

黙禱の杉そそる土佐伊予境

松山にて

狸通伍健路郎の書あり盃嘗めん

讃岐富士 一番星を簪に

大阪市 不二田一三夫

秋田実先生松竹芸能勇退へ一旬

小さくとも仁義をさげて従いて行く

太陽と父母の血きょうも生きている

貧しくも旗の色だけはつきりし

寄席

白けだす客へちよっぴりあわてだし

謙虚さを忘れて人気上昇中

鳥取市 河村日満

流行歌よう覚えぬを子が叱り

問い詰められ嘘言えぬ顔笑いだし

預血へのサーピスコヒーまで出され

はやすぎた晩酌今日も風呂さぼる

大阪市 山川阿茶

愚弟三十五回忌

ひっそりと心の通うものが寄り

恋飛脚二の口村

尻からげさせたし梅川雪の道

スピッツが汚れたまんま春が来た

美人女優ヨゴレで出る程芸が伸び

大阪市 西出一栄

素足ふと春の気配を感じたり

チャンスに強く小遣いたんと要り

心齋橋夢のつづきを見に出掛け

食足りて単を追わぬ猫になり

京都市 都倉求女

妻の母死去

大往生明治の寝顔へ手を合わせ

こけしまた旅の話をしてくれる

同病の話がこわい見舞客

よっこらさ寝床の腰のひとり言

宇部市 平田実男

子沢山投げ売りしたい子がおらず

何もかも卒業夫の座へ戻り

横道に曲って転んだとこを撫で

セールの良心短所も少し云い

奈良県 麻生アト

明日はもう忘れる辞書と知って引く

きんかんの艶やかなるを若さと見

信頼のきわみ猫の眼輝いて

わが坐すは弥陀の膝なり策無用

大阪市 大坂形水

大人居るあたりさわりのない構え

飄然とひとりの旅をしてみたい

寝違いをして憂うつな二三日

情報の電話をくれる得意先

大阪市 今西章雅

どうにでもなれが効いたか病気逃げ

一徹をついに通した霊柩車

コンピューターでは適性入試失敗し

佐藤さんの手品白紙でまだじらし

岡山県 直原七面山

私は枯葉と三十娘

入院をしてても色眼など使ひ

故 服部十九平氏に捧ぐ

君逝きし日の雲低く低く垂れ

校長逝きて黄薇苑学徒慟哭す

笠岡市 松本忠三

お流れを一つと言えば君は誰

馬鹿者と言われ出前のペダル踏み

養老院まさかと思ふ人に会い

記念写真最後列の父を指し

倉敷市 水粉千翁

出し切つてわびる力が美しい

とつときの顔は持ち合わせておらず

悔残す悔にはげましつづけられ

眠られぬ夜の広さの走馬燈

倉敷市 木村千容

としよりを言い草にしてあまえ病

紅肌の柏に永寿の神秘あり

宿り木の悲し親木と共倒れ

総入歯あたり当りで削られる

京都市 松川杜的

雨の嵯峨野にて(二一旬)

湯どうふのここ南天の見える部屋

湯どうふの湯気へ嵯峨野時雨れて来
王朝の悲恋をちよっぴり滝口寺
悲しけりゃおいでと雲が呼んでくれ

大阪市 金井文秋

長生きをせよと苦勞がつきまとい
貧乏神のいたずらか集金を忘れ
不完全燃焼で中年の恋
何不足ない顔をしてアイシヤドウ

島根県 藤井明朗

そうだったかと蔭口また歩き
花のプランへ家計簿から待ったが出
お隣りは新婚わが家は更年期
夫婦相和しお人好しまでも似る

熊本県 有働芳仙

いい友を得た喜びを若く酔い
始めてのルージュの色はパパにきき
白痴美もい金になるコマージュル
まん円い地球へ四角に住みなれる

笠岡市 木山遠二

度を超えた信頼背負投げを食い
落ち目の身人は冷めたいものと知り
死もよろし嘆くものさえ居ないなら

童顔とその毒舌を愛すなり

藤井寺市

西 い わ を

空の青山が染まってゆくようだ

スーパの冷めない処で別居する

葉末からしたたる露のごと心

指先に触れた金属ヘヤードピン

京都府

大 鶴 喜 由

とくとくとく今宵銚子の音がよし

手枕で見上げる花はほほえめる

逢えず去ぬ花見小路の夜更けの灯

たまさかに訪えば無心の予防線

大阪市

木 村 水 洞

苦情にはもうなれている公害課

姑にあまえて一家恙がなく

だまされて六法全書に興味もち

赤穂華岳寺

元禄の掟やぶって名を遺し

室戸市

奴 田 原 紅 雨

毛の生えるくすり老眼鏡を拭く

肩書はいらないさんま裏返す

嘘から出たまこと夫婦が出来上り

父と子のグラスへ雪よ降るものぞ

門真市 福 島 鉄 児

最高のムード消された電話ベル

ノックしきり居留守を使う目をつむり

恋楽しきっちり歩巾合っている

アベックの戻りは相合傘になり

名古屋市

吉 田 水 車

排気ガスもうもうたるに駐轆碑

外へ出れば七人の敵どころかい

モデル嬢クネクネクネと春を呼び

もうこれで安心と言う日があるか

岡山東

田 村 藤 波

共稼ぎ後めたさがつきまとい

栄転か左遷か春の配置かえ

今は亡き子の卒業の年になり

もうこれが近いと首を撫でて見せ

桜井市

岩 本 雀 踊 子

目だたない妻の仕草にある色け

御近所の子供は声で叱られず

還暦の父にすまない知恵をかり

肩もんでやれば妻が小さくなり

高槻市

山 田 季 賛

盛土に笹の新芽が顔を出し

又明日があるさと上役あつけなし
南天の赤さをモズが鳴いて賞め
ハナ毛抜いて仕事のプラン繰り直し

大阪市 児島与呂志

貧乏も貧乏らしく無い生活
若さとは自分で保つものなのさ
只一すじ若さあり靴音高く
白髪が氣に成つて来て春の朝

芦屋市 丸川初甫

一足ずつ進んでタクシー濡れて待ち
着だおれの京を祇園でふり返り
寺小屋はへのへのもへので幕があき

道行初音の旅

子狐と知らず静は踊り抜き

鳥取市 藤本礎山

スコポラミン ノイシリン アミノが俺を追い
やとと得た境遇病魔が襲うなり
寝てるのに阿呆らしい程瘦せてゆき
氣がつかぬ顔で博士の嘘を聞き

兵庫県 遠山可住

子は産まずと決めて女よ何処へ行く
エプロンに着替えわたしをとりもどす

そない阿呆と見えずきれな鼻通り
つっぱねた理性うつろにひびくなり

大阪市 横倉富久一

左右その中間に右左
露のとう腐葉の下で可愛い芽
貧乏に自信あるわと娘は嫁ぎ
起きる寝るだけの父とは淋しいね

守口市 羽原静歩

守口助役木田伊太郎氏の死をいたむ
家事という賽の河原に石を積む
衣食足り礼節知らぬ国に生き
インテリの財布小銭があるばかり
古惚けたベレーにも春の風

富田林市 岩田美代

仁王さんこぶしにぎって寒に耐え
佳き日なり雪の白さを手にすくう
切り花に芽吹く柳がつとほしい
相槌へ無難な言葉たよらない

松原市 谷垣史好

いやな予感ネクタイうまく締まらない
抱けば僕の細腕に余るなり
出す金を出して小心ほっとする

レオポンは不具と思てるかもしれず

富田林市 川端 東雲 楼

きょうはきょうきのうはきのう折目たて

この人も人情これまでというところ

泥ふいて一円拾う銀行マン

寄付事へ面子ぎりぎり旧家なり

和歌山市 垂井 葵 水

障子閉め部屋の歪みをさらけ出す

カメラマン女さかさに擦ける

ネオン潜り来て小さい部屋の鍵

石仏の羞恥乳房に雪が触れ

堺市 高橋 千 万 子

病む子には手鏡で見る雪景色

感情の整理もつかずしまい風呂

橋渡した恋なのになぜかやけ

真夜中のこんなに広い交差点

高槻市 福 田 丁 路

自己批判決る夫に殺気立ち

林檎丸嚙りのイカスお嬢さん

破廉恥が罷り通るや月朧

下関市 桜 川 不 水

手術して三途の川を引っ返し

春一番旅僧の衣ひるがえし

ふくらんで見たがちよっぴり寒い桃

大阪市 酒 田 清 子

意識不明数時間(二句)

憎まれもの又々息をふきかえし

人毎にあの世の様子聞きたがり

蔭口を笑うてすます肚が出来

竹原市 山 内 静 水

子に詫びる心四五日定まらず

三ツとも時計が違う朝慌て

我れながら今日あざやかに言えた嘘

出雲市 尼 緑 之 助

汽関車の煙がいどむお月様

演出は卒業式へヘルメット

人形も変ったものよ三十年

富田林市 浅 川 八 郎

自信ないらしく薬が又変り

この孤独些か強引であつたらし

求人難頼みのふるさと小企業

美禰市 安 平 次 弘 道

手段まで姑息になって来た落目

不幸中の幸金持ちに轆かれ

交通禍他人は補償額を嫉き

倉吉市 奥谷弘朗

アポロ飛ぶ世相へ黙ってする植樹

流行を追える若さがうらやまれ

無節より節のある木がお氣に召し

大阪市 水谷竹莊

一千万円の夢千円で買うて見る

立ち話するも近所のおつきあい

酔わぬうちに踊りなさいと黒田節

鳥取市 森本法泉水

同期生M君死去

松の内訃をきくことの重なって

放つとけばよいのに救援隊を出し

コマーションルこんなどころで痔の薬

大阪市 福井野迷路

己むを得ず息してまんねと野良犬

近付いて富士の素顔に裏切られ

天下り贈与収賄詐欺騙り

大阪市 河井庸佑

異動期でまた足を出す交際費

先生の直感通り伸びてくる

隣の子でできすぎ付合にくくなり

兵庫県 河原みのる

国策に沿うて稲作怠らん

一億やがて総ヘルメットガスマスク

誰ぞまた殺されそうな春の雪

笠岡市 出原真奇

重役も手の鳴る方へついて行き

血圧を云うから医者嫌いです

娘の匂い逃さぬように窓をしめ

鳥取県 田中蛙眠子

人生を忙しく渡る猫背なり

野鳥住むここも悲しい過疎地帯

余生よしほのかな虹もさすだろう

奈良市 宮口笛生

山代温泉

熱爛に頼んでいるも雪の宿

湯のぬくみさましに歩く宿の下駄

雪景気うれしく晴れて目にささり

大阪市 吉岡美房

政治家の無能を警棒支えてる

ふるさとを忘れ前科がふえつづけ

法律を知り過ぎ隣り遠く住み

岡山県 大森娛句楽

寝て起きて炬燵で読んで冬を越し
堅苦しい話を茶化すのも妙味

十九平氏を惜しみて

良か人が短命だとか古人謂い

宝塚市 小島 無聖

緯々としても下着を二枚はき

古城の美昔にあらずデイトの場

ひび裂けた心いたわる湯にひたり

大阪市 中川 滋雀

荷飾りを見た興奮で吐息する

老犬となって鎖が重い日々

食うものも食わずに肥える悩み聞く

ハワイ 羽佐間 柳葉

焼石に水だ増給も物価高

汚職するチャンスの地位に成上り

特価品勝手に選れと積み重ね

高石市 谷 沢 好祐

洩つてると知らずポンプは廻い続け

掃除機の音に追われて犬を連れ

さんさんにお待たせしまして歯科儲け

今治市 越 智 一水

女から話もち出す同窓会

すかれたいだから平気で嘘がいえ

A君お好み焼開店

お好み焼き心やわらぐ人という

岡山県 池田 古心

へソ曲り最後のドタン場まで黙し

あの時に売ったが因果値が上がり

競争をするよに夫婦医者通い

岡山市 川端 柳子

又次もくだらぬものにメロドラマ

はげしさをぶっつけお掃除派手にすみ

文才の無い淋しさを書き綴り

尼崎市 高津 徹也

小走りに追いかけて好かれない心

みだしなみ今日の仕事に満足し

杯をおいて別件持ち出され

鳥取県 森田 布堂

かりの身を浮世にさらす面白さ

小刻みの値上げに馴れてゆく怖さ

逝く水の断絶はなし過去未来

大阪市 福井多蘭子

病気でもないのに成人病センター

老友は静かに持病語り合い

酒とどくまでを葱つみ味噌と混ぜ

大阪市 宮尾 あいき

活けられて麦の穂実るすべもなし

私立校の特待蹴った児へ拍手
長女高卒
長女就職

誕生日亡母より五つ上になり

商品が札束と言う社に決り

たまに出た単があみに引っかかり

校庭の雪へ先生児に混り

大阪市 礮 弓彦

淋しげな音で十円玉が舞い

泉佐野市 大工 睦夫

ありし日の添木は根元でもたれてる

テレ笑いして髭面を紅くする

スーパ―が隣りの老舗吸い上げる

落葉焼く煙も午後は見捨てられ
お粗末な親で還暦知らしかね

奈良市 村上 春巳

パパママと呼ばせ月賦へ共稼ぎ

竹原市 小島 蘭幸

おどろきは雪一色へ子鹿の瞳

プロポーズまだ早すぎる貯金帳
彼女より下手でボーリングへ誘い

町内に住んでテレビのお水取り

「バカヤロウ」と簡単に言う男なり

八尾市 高杉 鬼遊

西成区焼酎孤独誕生日

伊丹市 小川 静観堂

待っているマッチヘタバコ出て来ない

俺の余生遺影の妻と差し向い
中陰がすんで手狭な仏の座

ぼやくのが好きでないから貝の真似

レクリエーションみたいに入試バスで来る

和歌山市 西尾 公作

寒玉子吸う喉仏天へ向け

岸和田市 葛城 伊三郎

飲んでから金を落したのにあわて

返盃の猪口に何やら着いており
井の中の蛙と云われ田を守り

上役が同席すき鍋煮え難し

立飲みでよばれお茶屋でお返しす

堺市 新谷 笑痴

笠岡市 木山 要次

七母の句(一句)

吾れの手を握りて撫でつ母は逝く

かあちゃんの白髪見つけた子の騒ぎ

聾だと云われつんばがおさまらず

香川県 岡田拳法

風邪長く終日ワニのように寝る

亡父ならばどうするだろう亡父恋し

明るさは父ちゃん元気になって来た

大阪府 西川誓二

好奇心そその話に欲からめ

注文の晴着に希望ふくらませ

奥山に浮世を厭うはぐれ鳥

大阪府 川口弘生

診察場の春はオープン戦のこと

払い得る喜び増えた税払う

分割で良いと税務署のご親切

兵庫県 大江秋月

因襲に歩調を合わせるも年か

立ち読みでクイズの宛名控えとく

十万円着せられマネキン無表情

枚方市 宮川珠笑

スモッグをにくむよごれた雪たるま

息をつぐ土工へうなるコンベヤー
冬眠の蛙に似たり朝の父

熊本県 楠田英子

窓みんなあけておきたい春の風

生きていくきびしさ故に寄り添うて

新婚の息子こたつに肩をよせ

平田市 久家代仕男

大まかな親切が好き頼り切り

煙たがられていて汚職など知らず

絵馬あせて木目の浮いた文化財

倉敷市 藤井春日

孫までが小唄まじりの台所

一生を棒に振らした口答え

訂正の跡へ鋭い監査の眼

姫路市 隠岐不酔

こりやうまいお手を拝借願います

顔と手のほかは借衣で式を挙げ

定年のサア明日から何したろ

和歌山市 土谷城石

予定日へどちらでもよい産衣買う

バスの旅事故は予定に入れとらず

鍋底の音が気になる壁一重

西宮市 島居百酒

来ねば無事来れば無心と云う便り

天ぶらにして冷凍が胡麻化され

ゲバ棒へ行かぬだけでも取り得と見

大阪市 天正千梢

日だまりの蠅一匹を殺しかね

しゃばっけ多く落ちつかぬ目玉

裸体から春をとらえてねこ柳

和歌山市 野村太茂津

お祖父ちゃん死んだらあかんと孫の珠数

みそなわす野仏の下苔の春

この頑固死ぬまで通す覚悟なり

大阪市 室谷鉄舟

ええ事を云わぬ易者に金惜しむ

ゆっくりと寝かして呉れぬ雪の朝

甥結婚

ハネムーン二つの歯車動き出し

大阪市 加藤貞山

バンコックの旅

冬服をホンコンシャツに替えて旅

タイの人山田長政様と言ひ

タイ平野ジャングル見える地平線

久留米市 永松道雄

冗談の言えぬ古風な家に嫁し

菊の薫り久留米カスリにしみこませ

三勇士聞けば子供等そっぱむき

富田林市 浅川八郎

春遠く何日の日冬眠終るやも

大欲は無欲に似て自嘲残る

すきま風二人で孤独かみしめる

ハワイ 上田紅溪

大根のくずとわかった白午夢

機械化で失業の馬平和なり

条約が切れりゃ始まるストライキ

鳥取県 清水一保

月へ行く道よりけわしい人の道

アルコールだけでは酔えぬ人と飲み

一句また浮んで家路の歩も楽し

広島県 高橋鬼焼

鳥籠の自由になれて空をすて

あごひげをなでて妥協へふみきれず

雪を踏む足音だけが春の音

岡山県 藤原秋月

新米と古米を兎も知っており

賞状へ額縁までは呉れはらず
朧月お地藏さんも歩きたかる

岡山県 江国 幽谷

バスで会い神前で会い名も知らず

ワンワンが鳴いてる所を掘れと云う

借衣裳だろう今度は紋を変え

島根県 福間 清夢

御位牌はそれでよしとは言うとらず

白髪のパパの参観辞退され

まだ伸びるお子さんですと云うておき

松江市 舟木 与根一

逃げ口上さすがエリート冴えており

清貧は板敷き黒く磨かれる

巢立つ子へおんな手ひとつ荒れている

岡山県 坂井 三葉

どの党も支持せずパチンコ玉を追い

歩道橋渡ったばかりに乗り遅くれ

赤く赤く咲けど私は造花です

松江市 中川 晃男

栄転の噂チラホラ梅ひらく

更ける夜を刻む蛇口を洩れる音

メモを繰る受話器はあごに預けられ

出雲市 野村 岬月

寄添うてやろう子のない私達

自己批判求めてるらし冷視する

又念を押して年だと笑われる

西宮市 野呂 鶉汀

地平線人さまさまに想うこと

ある時の女房に似たり鬼薊

珍客は帰えりに寄ると言ったまま

大阪市 古川 静波

その日から吠えず輪禍にあいし犬

寝棺に入ってまで議員そり返り

知性乏しく画廊でよく喋り

東大阪市 竹中 肖二

愛犬の自由小さな庭を馳け

リフトから降り立つ足に老を知り

応募者に社の経営を批判され

神戸市 仲どんたく

3DK当って今年生むと決め

仲居今日位牌と食べる折を提げ

松江市 岡崎 祥月

朝起き心地一人のものにする

しあわせをもとめしあわせ取りにがし

岡山県 横山 一声

戦争で青春つぶされた者同志

自家用車あるから嫁きたがり

京都府

清水谷 句楽坊

月へ行く話肴にコップ酒

東大阪府 森下 愛論

わしでないわしが彼岸の経をよみ
あの人を彼岸の鉦で思い出し

春はそこまで掌に風を受け

大阪府 宮地 双楽

背と腹にカイロを入れて釣る二月

奈良県 西辻 竹青

一日を作して余生の意義生かし
点滴を見つめて今日もや々と暮れ

三十年もこりず賀状をくれる友

加賀市 細呂 木魯木

よろしくと社長寡黙に着任し

大阪府 榊本 露児

哀楽も語らず仏像の笑み給う
病床のくぼみへ吾れの重み知る

信州北陸紀行

倉敷市 小幡 里風

女房にひかれて来ました善光寺

冬枯れの黒部溪谷寂として

水ぬるむ何か企らむメダカの輪
立て続けハクシオン元気に風邪をひき

大阪府 神谷 凡九郎

八尾市 古川 鶴声

どうにかとにかくそう言いながら生きてはる

みんな笑った皆笑ったのに僕

故郷へ通ずる道をバスは行く
匙加減効きすぎたらし腹を立て

鹿児島県 土岐 トク子

愛媛県 渡辺 曉童

泰然と母句作するのどけさよ

鶯の鳴く郷愁の文とどく

四十年柳人回想(愛媛県)
文武両道千石級は伍健さん

松江市 柳楽 鶴丸

水樹さんも振舞いも立女形

エープリルフルではありませんと招待状

東大阪府 竹中 綾女

生垣の縄取り換えて春迎え
日曜出勤不平云う夫なだめ出す

★

西尾 栗

山菜をつけた流れのかくれ里
これはこれ美人の里という清水
チェックの服遅刻して来てまくしたて
ソファーは脚を組めという高さ
派手かしらでもないよというこたえ待ち

北川 春 巢

ぎょうざの匂いで午前様帰って来
入社一年東京大阪股にかけ
春休み酒も手伝う子が戻り
七光りの人気テレビの視聴率
流行歌右から左の耳へ抜け

若本 多久志

尊とさは今日一日を強く生き
五蘊盛苦あ人間の業なるか
正論が吐ける齢なり古稀という
禁酒禁煙主治医勝手なことを強い
マドリッドパリーローマと夢駆ける

菊 沢 小 松 園

あなたから金取り去れば何がある
時計止めても時は流れて夜が明ける
サービスの限界人妻としての距離
金になる話しにも要る誘い水

叩き返したいおもいを戴く金包み

清 水 白 柳

窒息もせずに貨車から粉をおろす

関戸宗太郎君を悼む

冥土の柳界へ新風を持って近き

藤本礎山氏病臥

闘病をはげます窓の明るさよ

川 村 好 郎

ムードからやっぱり撒かれることにする

も一つの心は打算している善意

惰気に鞭打ちつつ冬の遠さかる

不足たらたら恩には背を向け

遭難のニュース批判の目で見つめ

旅のしおり

- ▼若本多久志氏は四月二十三日から約一カ月間、ヨーロッパの旅をつづけられる。
- ▼菊沢小松園氏は鳥羽、志摩へ旧婚旅行をされた。
- ▼福田丁路氏は道後温泉から瀬戸内海横断尾道へ一人旅
- ▼清水白柳氏は九州へ柳人を訪ねて川柳旅へ。

川傍柳 初篇研究

(七十一)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

551 ためきって嫁鎌くらへいつ付る

長笑

清||がまんがまんを重ね、その上がまんがならず婚家をとび出した嫁の行き先は鎌倉の東慶寺。

藤井||「ためきって」が切なさを示している。

高須||「いつ付る」は言いつけるで他人に言うこと、すなわち「つげぐち」で、ここ

では東慶寺へ「駈けこみ証証」をする。それが溜めきったことで、がまんがまんをしたことだというのである。

類句が多い。

岡崎||「親子していびりましたと松ヶ岡」

(明六桜4)

丸・岡田||諸説賛。

552 野がけ道嫁なんじうな事が出来

一 甫

清||ハイキングに出かけた若い嫁、途中で

代のこと、やろうと思えば野雪隠以外に方法はない。難渋なことに違いない。

高須||船と野がけは、嫁(または娘)には難儀なことが一つある。生理的排泄行為である。「野がけ道おりふしつれをなくすなり」(二三・8)その同伴者が排泄をすまして、サバサバした顔で追いついてくるのも間のないことであろう。

丸・岡田||同。

553 五条あたりへ豆いりや犬ッころ

清||不明。

川端||「大阪といゝたい所へきらず桶」の類句か?不詳。

高須||「雛の段五条あたりは真ッ裸」で、豆煎りも犬張子もゴチャゴチャと置いてある。それも女の子の楽しみひとつ。今なら、いろんなコケンを沢山ならべる。雛段を浴中に見立てて壇の下の方を「五条あたり」といっただけの句であろう。

前田||「ひな仕度ほうろく売もしたくする」(一九・23)があり、「豆いり」が雛祭用に使われたと思うが、豆いりの句には灸爨に用いられたのが多いので「犬ッころ」が句中にあるので、矢張り不解である。しかし「五条」が雛段をさす類句でもあれば前説に賛成する。

丸||高須説賛。五条は雛段の五段目あたりの洒落。豆いりは雛菓子としても用いられた。

岡田||高須氏説、ご明解。

554 ニッ三ッしづくをふって菖蒲ミセ

眠 狐

清||「あく迄ぬれて蓬菖蒲やせうぶ」(傍一・29)と雨の多い季節の商売故に商品である菖蒲も濡れている。「ニッ三ッしづくをふって」と、ぼんやりしていれば見逃し

てしもう動作をたくみに詠んだところ佳。

藤井||賛。生きた句だ。みせは「見世」ではなく「見せ」だ。

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

眠 狐

高須 葛蒲を買うにも女気のあれこれと迷う。「ちょっと、それを見せて」という。

あながち、雨の中を売って歩くと考えずとも、切つて来た葛蒲の生キ生キと水々しい情景とも考えられるが、特に雨期、雨の中を売り歩くと解しても、ムリ解ではない。

岡崎 礎稿に賛。雨あがりだろう。

丸 同。葛蒲を買うにも……とまで突つ込む必要はあるまい。単に葛蒲売りのしぐさとして、観察の徴をとる。「ミセ」はもちろん「見せ」である。

岡田 諸説に尽く。旧暦五月端午の節句はいまの六月にあたる。梅雨どきだから、葛蒲売りに濡れてくるのだ。

555 ほうばって女房をじらす雛の菓子

燕子

清 女房をじらす」だから、つまみ喰をしたのは亭主。折角の雛祭にこんな親父をもつた子供が可哀そうと、母親は腹を立てる。しかし、ありそうなこと。

高須 白酒どろぼう嫁笑いく追いと同巧異音。どろぼうが、小さなワカラズやなら「雛棚へ艾を置くは姉の智恵」(一一・

・30)ですむが大きな腕白ではそれもならぬ「雛の座敷から男はおし出され」(一三・21)で、兄も弟も、もちろん亭主もみな落外へ追放令が出されるのである。

丸 賛。ただしこれも雛祭を心から喜んでいるおやじの心の現れであろう。

岡田 亭主のいたずら。

556 そろ／＼引に生酔を涼台

泉河

清 死んだようになって寝ている酔っぱらい。これを涼み台に運ぶわけだが、目をさまさればあらはれてはまた迷惑をする。それでそろそろと静かに運ぶことになる。

川端 涼み台で眠ってしまった生酔である。夜もふけてきたがいっこうに起きそうにないので、落ちないようにそろそろと涼台ごと、家の方に運んでいる情景と思う。

高須 「ほろ蚊やを馬鹿／＼しいと酔がさめ」(傍一・38)「生酔はぶち殺されたように寝る」(傍一・34)など既出の句があるように、涼み台へ眠ってしまった酔漢に

長屋中の思いやり。「そろそろ引き」が山車を曳くよう、案内者の衆、楽しんでるのである。

丸・岡田 川端・高須説に賛。

557 合紙のしこたまあまるやり放し

門柳

清 不明。

藤井 合紙は「広辞苑」によると間紙で、物の間にはさむ紙とある。内容物のいたま

ぬためにはさみこむ紙だろう。

箱の内から置物をとり出し、また改めて格納するときに、一つ一つ前通りに間紙を入れないと紙が余ってしまう。従つてやり放しのいいかげんな手合では、しこたま余るわけ。

高須 たまにしか使わぬ腕・膳などの器物には、出した時の「あい紙」が、そのままとつてあるが、いざ仕舞うときに丁寧に仕舞わないと、そのあい紙が沢山あまる。すなわち「やりっぱなし」やの仕事であるという句である。

丸 藤井・高須説賛。「間紙をしこたまあまし叱られる」(三〇・31) 岡田 同。

黄銅六角ボールトナツト
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 三四五二一四
夜間 662 四四〇八

同人特集 四百字詰三枚の柳論



ひとつの

剽竊擁護論

早川清生

いわれないのは、あまりにもあからさまであったことなどのほかに、表現や主題が似ていても、素材さえ変えておけば、さしもある非難を受けないという妙な慣行のせいでもある。なお盗作が批判されるのは、多くは賞や榮譽を伴う場合であるのも、この間の卑しい心情を物語る。

例の歌会始における盗作事件から、年頭になると定例のように、どこかでこの問題がとりあげられることが、一時期つづいた。総じて舌鋒きわめて鋭いのは、この種の行為に對するわれわれの潔癖感とともに、その裏返しとしての、お互いともすればこういった誘惑に、おちいりやすいことを、示しているのではないだろうか。

語呂合わせのように、「学ぶ」とは「真似る」ことであるなどというまでもなく、また現代の教育理念がどうであろうと、実際上学ぶことが、ほとんど模倣に終始しているのは周知のとおりで、文芸を学ぶわれわれが、何

らかの意味で模倣を行なっているのも、責められるべきことではない。問題になるのは、それが習作の段階で行なわれるのでなく、かつ自らのものとして吸収され再生される過程を経ないで、創作を装って提出されるところにあるのかもしれない。俳句からの一例だが海の鴨発破直前かも知れず 誓子
という作品を典型として「……直前かも知れず」という言い方が次々と誌上に登場したことがあり、同様のことは差こそあれ短歌でももちろん川柳でもしばしば見られ、ひとつの流行となることもある。

この場合は一種の模倣ではあっても盗作と

文芸が創造活動であるといっても、毎作かならず新しい境地を開拓するという具合にはいれない。各誌に見るおびただしい類型の屍は、天が下には新しきものなしという言葉を実証している。ライシャワーは「文明とは九分の借用と一分の独創」だといっているが、一分の独創の気が遠くなるほどの至難さは、誰もが実感するところだ。作家には作風があるけれども、作風というものも、極言すれば自分の前作に對する模倣の集積といえなくもない。ところで山本周五郎は言っている。
林房雄はひとしきり「外国物のヤキナオシ」を各方面に勧誘していた。「そのくらいのこと」が、出来なければ、一人前の作家でない」など、ひどく肩を怒らせたようであるが、これは大仏さんと同様、林房雄さんも

たとえ「ヤキナオシ」だと威張っても、実は純粋な彼自身の作になってしまふ能力を所持しているのである。

この話はわれわれに多くの示唆を与える。いつか大阪の市民川柳大会で、映画をみてから、それをテーマに作句したことがあった。いふなれば集団盗作大会かもしれないが



川柳の徳

浜田久米雄

私はおもしろいアイデアだと思った。川柳が詩論などから、ビタミン剤を注射されている以上、各方面から栄養そのものを貪欲に摂取すべきだろう。川柳を衰弱させないために、なお念のためご心配な向に申し上げるが、卑しい心情による盗作からは、決してその人のレベルを超える作品は生まれぬのだ。

これを柳友という。川柳の縁で友だちがふえてゆく。趣味によって結ばれた友だち同志の人間味の触れ合い、たましいの交換はほんとうにありがたくうれいしもの。

○思ったことが腹ふくるるなうらいであるから、しゃくにさわること、気に喰わぬことはひとりでどしどし句になって発散する。従って心のわだかまりがいつもない。ありがたし。

○無聊に苦しめない
鉛筆と紙があれば事足りる。一人旅、ひとり居の留守番、誰に気を使ってもらわなくともひとりいて結構たのしいのである。碁や将棋は二人、麻雀は四人も要るのに。

○けが、あやまちが無くなる
川柳すると一歩退いて考えるからけがをしたり、あやまちはしなくなる。これが無病息災の源ともなるからありがたいものだ。

○生活にうるおいが出てる
川柳の雑誌、句報が届く。句会の兼題と取り組む。雑誌へ投句する。句会が迫って来た

これは柳論にならぬと思うが折角の機会が与えられたので平素考えていることをままとめて見ようと思う。昔山雨楼さんが川柳雑誌で「川柳十徳」を書かれたことがあるが私は私なりに川柳の徳を讃えて見たい。川柳をはじめめて三十数年になるが私は川柳によって幾多の恩恵を受けて来た。これをひとつひとつ指を折って見ると次のようなことになる。なかには相関連したようなことになるかもしれない。○物を見る眼が突って来る
川柳をはじめる前には唯漠然と物（人を含めて）を見ていたがもう一歩突っ込んでいけばその物の中に入りこんで観察するようにな

る。句を作るためには上っ面だけを見ていては川柳の味が出来来ないからである。
○話題が豊富になる
人の話、雑誌、ニュース、新聞、テレビなどどれを見聞しても私は川柳をやっているという気持でいるので頭に残る程度が違ってくるからいろいろな面での話の種が豊かになる。

○字を覚え古事来歴の研究が深まる
自分が作る時は間違った字を書いてはいけなから辞書を繰るし他人の句を見てわからぬ古事古語については人に聞いたりなどして研究しなつ得し腹に納まるのである。
○友だちがふえる

本田恵二朗著
送料共 百円
砂の足跡

中島生々庵著
送料共五十円
川柳講座

また柳友と話し合える日が近い。
○世の中が広がる。
あらゆるものが川柳の材料だ。一人いてもたのしく世の中が見渡すことができる。
○人格が円満になる



にんげんと川柳

奴田原 紅雨

かくして川柳人は角がとれ人間が丸くなった。以上で川柳の徳を十項並べたがいま川柳している人はやめないうちに、これから始めようとする人が一人でも多くなることを望む。

最近若い人の間に軍歌調のものがよく売れると言ひ、細長いズボンを着いていても愛国心はあるんだねと、レコード屋のおっさんは妙なことを言う。そういえば、忠臣蔵の映画が上演禁止された頃から昭和の狂想曲が始まり、時は流れ動いていることはたしかである。昭和維新とか、昭和元禄とかの活字が見られる時の流れの中で個性を追求し、世相を客観するのも敏感な眼をもつ川柳の常である。

だが、動いている時の流れの中に旧態依然として柳誌発行の運営のむつかしさと合せて新人導入のむどかしさを嘆く声は三十年前から変らず足ぶみをしているように思えるのはなぜだろう。政治をやるエライ人が集って人を作る話を聞いたことがあるが、どんな日本人が生れたか未だによく判らないことを思う

といよいよ混迷した時代にこそ、人情や愛を蘇えらせる、自分を忘れていない川柳をさとることが必要だと思う。さとするということは自分をさとることであり、自己を養い、人をつくることである。

昨年来川柳論争はまことに華やかであるがそれは柳誌の中で、一般大衆は相変わらず無頓着のようである。昭和七年から川柳を作っているが、俳句を作っておっさんと呼んでくれている、川柳のおっさんとは呼んでくれない。俳句ではない川柳だといっても、俳句のようなものでしょうとうそぶかれる。川柳という呼び名は言いくいのだろうかと思ったりもする。誰かさんの、一人のひとに判って貰えばよいと言うのと、誰か大人の言う十人に判ってもらい百人の味方が欲しいという言葉を思い出し川柳の宿命を思う。

平安の福永清造さんがこちらへ見えられたとき、柳誌が二つあるよりも一つにして強いものにしてはどうか、と言われたことがあるが、合併すると、一方の柳人はたちまち影のように消えてなくなる例はいやという程味わって来た。そして現在なお、三十年前と同じように何んとか手を打たねばますます細ってゆくだけだと嘆く。うすべらな柳誌でも月々発行してゆくということは川柳を作ることよりむつかしいものであることは地方誌中央誌を問わない。

人間が生きてゆくのに向上年があるように川柳もまた努力する苦難の道ではない。創っても創っても駄目だからきょうもあすも川柳し、明朗な、健康な自分をつくるべく川柳をつくる。そんな繰り返しに終るかも知れないが、努力の中にこそ真実があり、愛から発する生きた川柳の創造の中にこそ正常な人間が育くまれ、川柳グループの向上もあるのではないだろうか。

七年間の野戦から人間を見失い、復員して人間の正体が判らなくなつたように川柳も未だにも判らない。それなのに選をしたり、柳誌を書いたりするのは、判らないうところに魅力を感じ、わがらうとする心の動きの現われかも知れない。誰も何も書かないと反省もなければ、進歩もないように思うときもあり書いてみて結局自分を反省することばかりで嫌やになることが多い。

良い句をつくるということだけでなく、人間がつかられていくかどうかを考える。



三分間の柳談

高橋 高薫風

「薫風さん、こんにちば。郵便物がどっさり来ていましたよ。」

「ありがとう。編集室からの『三枚の柳論』原稿依頼と、これは、小野豊さんといって川上日車さんのご令妹からなんだ。路郎先生からお聞きした話だが、『雪』という雑誌の編集会議は、路郎・日車・柳珍堂(俳名鬼史)といった面々が、金屏風をめぐらせた座敷の芸者の並みいる中でやったとのことです。全く距世の感が深い。路郎・日車の句といえは大きさ深さが違う。人生を深く見つめ、ひたすらに生きた人の味わい深い句だ。チマチマと小才の効いたものじゃない。」

「日車句集を初めて見て、こんな時代にこんな句が作られていたのかと驚かされますよ。」「僕は斗志が湧くんだ。路郎・日車を乗り越えないことには後進としての面目がない。何もかも吸収して新しいものを創り出さないことにはね。」

「云うは易く、行うは難しのためとえ通る:」

…。

「生活態度の問題でもあって、今は月給を日割勘定するようなタイプや家庭に閉じ籠ったタイプの句が多いが、僕もふくめて、例えば今問題になっている学生騒動が各地に起っているが、その中へ飛び込んで自分の目で見てやろうといった川柳家がいない。皆仕事に追われていて忙し過ぎるんだ。時代の趨勢なんだね。」「昔は句会の後でも夜を徹して柳論にうつつを抜かしたとか。」

「日車さんにはこんな逸話がある。日車さん三十一、二才の頃長男が生れた。名付け日がりぎり迫っているのに日車さんは名古屋で流連をしていた。家からは電話で子供の名の催促。日車さんはその時座敷にいた芸者の名前を聞かれた。」

芸者は「照松」と答えた。よし、それにしよう」と長男の名前を照松と決めたそうだ。兎に角型破りなんだな。」「日車さんは何処かの句会で選をされた時、たった三句抜いただ

けであとは全部没にされたとか。」

「僕もそれは聞いた。何時何処の句会でだったか。その題は、その三句というのはどんな句だったかなど興味があって、そういうことを調べるのに河相すゝむさんにもお頼みしたことがあったが今だに確証は得ていない。が、日車さんらしいじゃないか。今の句会で

だって、そういう選者が一人位各柳社にいて欲しいと思う。主幹ともなれば営業政策上そうもならないだろうから、目のある人で、人格者で、川柳社でなら清水白柳さんあたりが三彩と佳吟ぐらいだけの句を探るという極めて厳しい態度で選にのぞむ。その代り入選すると実に痛快な思いを投句者にさせる訳だ。これを一、二年続けて戴けば句会の効果も挙がるのではないか。今の句会では選者との対決の意識も薄いようだ。」

「路郎先生の著書『新川柳評釈』の序文に『句はその人のころ、十七音字はその人の姿、リズムはその人の呼吸である。』とあるが、その意味で、柳誌での分ち書きも実現して欲しい。まだ云いたいことはあるが、『三枚の柳論』だから。」

「『三枚の柳論』が『三分間の柳談』になったね。」

若本多久志句集

高薫風句集

高鷲亜鈍著

老いの坂

れもん

白黒記

秀句鑑賞

…前月号から…

清水白柳

宝石の悲哀永住権がなし

王 紫

宝石の悲哀それは女性の悲哀でもある。この作者は宝石に託して自身のことを、いや女性のことを言いたかったのであろうか。そこまで詮さくしてはいけなないかも知れないが、よくうがっていると思う。

回想

花街のひとり娘は閉じこもり

三井 醉夢

回想五句のどの句もよかった。得てして回想というものは、センチになり易いもので、他人から見ると余り心を打たれないものだが、この作者の句にはシンがあつてひきつけられた。

一歳の恋人 不二田一三夫を狂わせる

不二田 一三夫

前月号の川柳塔同人作品の中に孫の句が八句もあった。その中の一句だが、この「一歳の恋人」という現わし方にはマイッタ。さすが筆でメシを喰っているだけにうまいものだと思う。そして自分の名前を入れて動かないものにしてているのも、心憎いテクニクである。

迷いきし鳩の瞳はわが愁い

久米 奈良子

迷い鳩の瞳をかりて自分の心を詠っているのが食い入るようにひびいてくる。女性のせんさいな心理がのぞいていて、その愁いを快いものにしていくようである。

沈黙の重さたえがたく恋あける

天正 千梢

何かちょっとした心の行き違いからものを

蟹は横に這うからたわむれなくなり

酒田 清子

啄木がどんな気持で蟹とたわむれたかはこの作者にはどうでもいいことなのだ。ハサミをふりながら横に走るからつまんでみたかっただけで、そこにこの作者の心の動きが見られる。

蝶つまむかそけき昇天憶いつつ

飯家 和美

腕白な男の子ならトンボであれ蝶であれ死んでしまつたら捨てるまでのことだが、若い女性にはそれが昇天とうつるのである。カテーテレビの一こまを思い出させてくれた。

捨て犬の哭くだけ哭いて島に馴れ

浜口 志賀夫

この句の作者は私と同年生れで、しかも職業まで同じであつたという因縁のようなものがある。今は不幸な病のために島に住んでおられるのだが、この句のような心境になるまでにはどれだけの苦勞があつたか計り知れないものがある。島に馴れという五文字に万感がかもっているのを知るべきであろう。

両手があるから左手怠ける

谷垣 史好

梶元紋太先生は御不自由な左手で心をこめ、たお便りを書いて下さつたり、原稿をお書き

になつておられるのには頭が下がる。この句の作者は恐らくそんなことを知らないであろう。が、この句の持つている軽い味わいの中にそんなことを教えてくれているように思えた。

骨壺がパパでは子供臍に落ちず

出原 真 奇

鋭い眼で作者はその母子を見つめている。非情ともれる程の鋭どさではあるが、この眼の底には温かい思いやりがひそんでいゝ。それを見抜くのが選者の眼である。

里帰り盗人程は持つてゆかず

西山 綾 子

わざとらしいユーモアでなくて、クスツと笑わせてくれた。それは句の底にひそむ愛情がそうさせるのだと思つた。憎まれ口も温かい心から出れば笑えるものなのだといふことがよくあらわれている。

一心同体妻の下駄が履きにくい

脇 本 政 己

年古りた女房ともなると主人の下駄を一寸ひっかけて出ることがあるものなのだ。併し男には女の下駄は穿きにくいものだが、この句はそれを言っているのではない。そのことを借りて女房御し難しと訴えているのである。それは一心同体という語によってそれをさとらせようと作者は思つている。

無報酬だから大きなことが言え

鈴木 林 諷子

世間には名誉職という名で雑用に追いまわされてゐる善人がたくさんいる。趣味の分野でも御多分にもれず僕などもそれを喜んでゐる一人なのだが、えらそうなことを言えるのが楽しいのだなどといつたら止めさせられるかも知れない。

足跡を残そう砂のある限り

本田 恵 二郎

恵二郎川柳句帳「砂の足跡」を読んだ。そして恵二郎の心の底にあるものと必々対話して、矢張り川柳家恵二郎は尊い心の持主であることにあらためて触れたのである。句会の席上や座談の時の恵二郎に見られないものを探るにはこうした句集が大きな役目を果してくれるものであることを改めて教えられた。

遺 句

テーブルを叩けど拍手湧いてこず

服 部 十九平

豪快な川柳家服部十九平が忽然としてそれこそ忽然として世を去つた。天命といふものはいつどこで、どうして終るものなのかは誰も知らない、そうなればこそラッシュにもまれ、危ない道路も渡れるのである。その一瞬に定まった天命が終つたとして誰を恨むことも出来ないであらう。返えすがえすも惜しい人を失つた。謹んで御冥福をお祈りしたい。

雪見えて特急列車熱帯びる

橘 高 薫 風

季感の句というものは、季感に引ずられてしもうと上迂りした説明句に陥りやすいものだが、この句の雪はどつりとした落つきを持つていて動かすことが出来ない。そして特急にのつてゐるその躍動感に作者も共に熱を帯びて来たのが感じられて頼母しい。

春の霧忍者が潜んでいそうなり

坂 東 若 芽

この句も上五文字に春の霧があるが、この季感も生きてゐる。それはその霧の情景をあらわすために、忍者がかくれていそうだと、作者が感じたのを素直に描いてゐるからだと思ふ。

真っ先に歩は殺されるためにあり

吉 岡 美 房

一将功成つて万骨枯るとか、言う古語がある。もう今では生きてゐないのではなにかと思つて、どうしてどうしてあらゆる社会に生きてゐるのだ、作者はそれをとらえている。

城下町蝕ばむようにヒルが建ち

藤 本 礎 山

古い家屋が取り払われて、近代的な建物に変わつて行くのは当然のこと、そこにこそ生活の進歩があるのだが、それがテンデンバラバで少しも全体的な計画がないところに盲点がある。だからそれが城下町であるだけに蝕ばむようにという感じは適切だと思つた。

悪筆と川柳屏風

東野 大八

私の字は日本流でいえば悪筆である。だから各柳誌に書きとぼしている文字には、どんな嚴重な校正が試みられていても、必ず二つ三つの誤字、脱字がある。しかし、絶対訂正は申入れない。私にその罪があるからだ。

これは若いころから時間的拘束感の強烈な新聞社の編集で、たまたま込まれた文字辭による。あと五分、三分という締切時間に、社会面のトップ記事を書かねばならない。給仕君が背後に二、三人つっ立っていて、ザラ紙に四、五行ずつ書きとばすのを横合いからひったくりあって工場へすっ飛んでいく。読み返えしものにもあったもんじゃない。

「石原慎太郎の字ね、ありや、字っていうもんじゃあない。芝生の枯れ屑みてえだ」と友人は私を慰め、その点お前の方はまだ文撰が相手にするだけサマはついでる、ついでるである。

北斎書の趙彦深伝にこういうことが書いてある。

——仲将は、群書にわたり草隸をよくしたが弟に与える手紙は一字毎に筆画の正しい楷書で書いた。そして人に言うには、人に出す手紙に草書を用いると先方を軽く扱ったと思われるキライがある。それは家の者の目下にあつての場合と同じで、その心がけでなければ、人に手紙は出すものではない。

私にとって誠に痛い言葉だが、成程そういえばこんな例がある。唐の李玄道が幽州の長史でいたとき、都督の王君郭が無道の振舞が多いのでよく諫言したことだが、ある時、李が宰相房玄齡にあてた手紙を、君郭がこっそり開いて盗み読みしようとしたが、草書で書いてあるのでさっぱり読めない。スネに傷もつ彼は、さては自分を陥れる企てありと推測して謀反を起した。おかげで罪のない李玄道

も連坐しているとみられ四川へ流罪となつた。

宋の高祖は、かねてから字が下手だったので困っていた。穆之が教えて言った。

「自由に大きな字をお書きなさい。さすれば拙きはそれに隠れ、みた眼もきれいです」
かくして高祖は一枚の紙を六、七字でいっぱいにし、紙一面竜蛇躍るとおべっかの連中がほめた。高祖の宰相張浚も草書が好きで、よく詩句を書いた。ある日、彼の甥が清書を命ぜられたが、竜蛇飛騰の図をみるようで、読むどころか呆然となった。一日中ならめておしていてもハシにも棒にもかからぬ。かくておそるおそるはじめから読んで頂きたいといった。すると張浚は舌打ちしながら解説にかかったが、忽ち血相を変えて憤った。

「なぜもっと早くききに來ぬ、忘れてしもうてもおれにも読めんじゃあないか」

宋代の名政治家で、文章では超一流といわれた王安石も、興至るほど竜蛇奔騰の文字となったので、貰った方はその書を手にするたびに長嘆息して頭をかきむしって痛惜するのが常であった。ある人など、これはカギのかった石箱の如しと絶望感をヒユヒユしているほどである。

宋の丞相宋羊は、文字学に精進した学儒でもある人だが、書記が平凡な官報に俗体で宋羊と書いて了解を求めにくくと、

「わしはつまらぬ人間だが、まだ自分の姓名を書くことはできる。これはわしの姓名ではない」

とかんかに怒ってつき返したという。頂羽は「書は姓名をしるせば足る」といって、自分の名のほかは、文字を覚えようとしなかったというが「政治は学識より俗に徹すべし」といった顔之進の卓言を私は思うのである。戦国乱世ならなおのことである。

路郎・水府両先生の筆蹟は、柳界でも極めつけの達書能筆で知られている。和田黙然人は、北京で私に田中五呂八の短冊を示してこ

う言われたことである。

「彼は生涯七枚の短冊しか書かなかった。その一枚がこれだよ。したがって水府・路郎

・三太郎より稀少価値があるわけで、随って値もすぐく高い理屈になる」

その五呂八の文字だが、少しも私は下手とは思わなかった。ただ風韻に乏しい点はたしかだ。彼はその雅味風韻を侮いたのであるうか、また色紙短冊に句を記す行為に反発してのことであろうが、それは私にはわからない。私は色紙、短冊を持出されるたびに、背筋が寒くなる。それはいま述べた両者が、私

川柳日記

麻生 葭 乃

二月から三月へ

河内平野見下ろす梅はまだつぼみ

何様の社と社務所また聞かれ

雀チヨンチヨン朝の序曲の生駒町

寒がりへカーテンを引く雪あかり

静養の永さ彼岸はもうそこに

お水とりすんだと霞む二月堂

八重桜奈良はほこりの立つ弥生

猫それぞれ家の誰かをファンに持ち



の五指を抑制しているからでもある。

むかし、四国の松山あたりへ行くと、碧の軸や色紙、短冊は巷間にハンランしていて、誰もさして「碧梧桐の書」に興趣を覚えなかつたものだが、それは岐阜の伴暁、北京の呉佩孚の書の如きものであつたようだ。だが、彼等が亡き今となっては、はじめて価値観が当業者の関心の度合に応じてそれぞれ育っていく。絶版の新書 古本の貫録にそれは通じている。

とにかく私は、良齋雑説の李濟翁の言葉に賛成である。翁いわく「書を借るは一痴、書を惜しむは二痴、書を索むるは三痴、書を返すは四痴と。予はこれに続けていわん書を蔵するは五痴と」

悪筆が妙な筆法を生んでしまったが、私は悪筆という二字で、性格露呈の欠陥を象徴するのはちと行きすぎだと思ふ。痴筆、愚筆の二つがあつてもよく、呆筆も加えると面白い。

私のは殊に呆筆に価するようだ。私は色紙短冊は数えるほどしか書かなかつたし、その類のコレクションも十指に満たない。それよりも私は、私あてにきた諸柳友の心あるもの、たとえばハガキ、書簡類を屏風にびったり貼りめぐらし、その中で病臥の楽しみをくりかえして、三尺高い木の空に上りたい。それを私は川柳屏風という。

拝啓

高鷲 亜鈍

ありがたい事に、いつも月に二、三通激励のお便りを頂き、いちいち御返事に事欠き大変申し訳なく思います。その中で時々、未知な方から、お前が口癖のようという「詩川柳」は、川柳詩のいい間違いではないかというお問い合わせには、今の目に不自由を啣っている私には、過去のように柳論を書き綴る意欲が持てず、御納得が出来るかどうか分りませんが、今一度御説明したい点は、「詩川柳」と川柳の頭に詩を被せた事に意味があるという事です。

それがための数年前、川柳塔の前身、川柳雑誌社から出さして頂いた「詩川柳考」エッセイ集であったのです。どうぞその本を読んで御理解下さいと、宣伝する気持はありませんが、しかし今も尚、詩川柳を川柳詩と置き換える気持はありません。手取り早く申し上げれば、川柳詩とは川柳という詩という事ではないでしょうか。いい換えれば川柳も、詩であるという事、これが問題なのであります。

す。

川柳は詩でない、川柳否詩の立場をとる私には、ある意味では川柳の存在理由を肯定し、川柳それ自身の純粋性を認めたからです。だから現代川柳人が、古川柳概念をもって明治中期に復興した久良伎剣花坊の頃、川柳の三要素といわれていた笑い、軽み、穿ち、柳をもつてする川柳は若い人は勿論の事、私ごとき中老の者でも人生経験をかすつてきたぐらいでは、とても古川柳（柳樽初編）のような味を狙った名句が出来よう筈ありません。

現代川柳人が江戸時代の川柳を、そのまま作っているとは思いませんが、そういった川柳の三要素をもって、その時代の風俗、習慣、道徳で、人間関係あるいは、その住む家庭、社会、国家を詠んだとて、私は何もう事はありません。そういう方が川柳は人間の詩、人間関係の探究、人間性の探究と、勿体らしくいう事自体が、川柳の純粋性を否定する考え方であって、川柳は人間、人間関係によって生じる笑い、からかい、諷刺以外に何もなく、その事が何故に人間性の探究などと掘り下げなければならない理由があるのでしよう。

また、そういった事柄を詠んだものが、人間の詩等といってしまうのは、とんでもない事です。詩とはそのような皮相的な見方をもつてするものではないからです。

詩は川柳以前のものであります。一般にわれわれと同様に協同生活している人間だけでは詩はありません。その人間一人一人の内部にある観念が詩であって、その詩を外へ出す事によって人間の普遍性を表わすもの、例えば表わす場が短い言葉、即ち私という人間が庶民である、庶民の持つ表現形式としては、最も簡単な記録するにとどまる川柳形式を取つた事。いわば川柳とは、私の場合はその形式として、古川柳の概念を抜き出して単に、その時々々の記録にしかみない。

少し難しくなってきましたが川柳の持つ三要素を抜き出すという事は、塩から塩の味を取ってしまつて砂のようなものにしてしまう事です。今ひとつ重ねていい度い事は、庶民の口にする日常の言葉、それは誰にでも分る言葉で、人間内部にある詩（観念）、といつてしまつてはお分りにくいと思いますが、平たくいえば人間一人一人が考える「考え」を川柳という散文の場へ放り出すためには、川柳以前に詩を考える事。

即ち詩的精神を持った川柳、縮めて詩川柳と私は造語したのであります。この事はどうしても分つて頂き度い。私自身尚いい足りない事はまだあり、「詩川柳考」をもってしても不足な点が多々あり、あるいは恐らく、死ぬまでこのようなハンパな気持で終る事になるでしょうが、残念であります。

五十番食堂

わたしの家を出て約十米の路地を抜けると左は山手、右は山陽線の通るガードをくぐり、国道二号線を渡って新開地に行きつく昔の、赤線地域交して小料理、洋酒、スタン、バー、キャバレーなど立ち並び、女などべつづくのがわずらわしい。元來私は、眼の良い時から女のべつつくという遊び場所よりは、ストリートでパイ一屋で機嫌を上げる方を好んだものである。

一時、眼の手術をして医者から堅く禁酒を命じられた一、二年は大人しくしていたが、最近完全盲目になってから、元の飲ん兵衛に戻り、一升の御神酒でも三日ともたず、無くなれば行きつくところは、家の近くの五十番食堂でぐうぐうというのが楽しみになった。この五十番食堂は、夏は掻き氷、冬はおでんをやる支那そば屋であるが、わたしが夜る家におらない時は、山から吹き降ろす厳しい北風

今となれば捨てられたのは父のほう

山麓の温泉宿で狂い咲き

御正解人生の目的ハイ死です

義理人情花鳥風詠御蔵入

雨音をさくには五月の窓あけて

硝子戸をあけて雨足きいて

にむかって、身を晒しつつ金光教会にお詣りする時か。さもなくば、その北風と金光さんに背を向けて、いそいそと、杖もどかしく五十番に馳けこむのである。ここでは六十過ぎの太っちょのお婆さんは、尾道でいちばん初めにラーメン屋を始めたといひ、戦前先立たれた主人直伝の手打と、味自慢の支那そばが表看板で、客の所望によつては、焼酎や二級酒位の大衆酒を出してくれる。但しわたしの場合は一杯六十五円の二級酒で、三角のビールに入つた豆や、五枚一組になつたのりに、時にはぶつぶつ沸いているおでん鍋から串に刺したスジ肉を右手に、喰つては呑み、呑んでは喰つて、二杯まではスピード早く、三杯目位から調子を落として、四杯目に口をもつてゆく位で、表看板の支那そば等目もくれない。その頃合、どやどやと、景気の良い二次会連中や、マージャンを終えた四人組や、新開からのホステス連中で、席はいっぱいになる。既に時計は零時を過ぎてしまつて

いる。

「やあ、先生」といつて男の声、女の声が色とりどりに、わたしの耳を打つ。わたしもそれらの、馴染みある声を振り分けて、いちいち答える。中にはまあ一杯とコップをさし出せば、それを返しました、きれいだころからも、そばを驕らされて、にやにやとするわたしの表情は隠し切れず、完全に御機嫌となつて、再び腰を落としてペチャペチャとしやべりまくるのである。

さて読者の方々には何故、その連中が筆者を「先生」呼ばわりするのかと、お尋ねになられても、実は私自身すら分らないので、いつの間にか誰れいともなく私を先生扱いにしてしまったのである。あるいは最初あんなの先生くらいに思つていつたとすれば、正直にいつてわたしは嬉しいが、そうでもないらしい節が感じられる。というのは庶民の中にとけ込む事の出来ない過去からのエリート意識が出ているとすれば、それが寂しく思われ、ひしひし孤独感におそわれてやりきれない気持になるのである。

心にもない拵きびしいこの身体

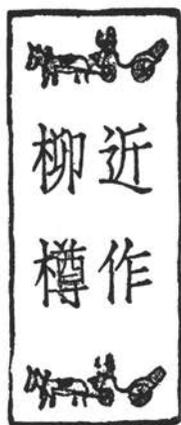
花園を荒す盗人ただけだし

破つては捨て破つては捨て音になる

おもいきりどややつけたい子のエゴ

父なし子を生んだ二女にも母の顔

むっちりとした手がほしい杖がわり



菊 沢 小 松 園 選

竹原市 三 宅 不 朽

消えてゆくだけの煙りも影をもち

落葉踏む音に身を置く旅ひとり

春愁の昼の鼓を聞くごとし

火葬場の鏡しげしげ見つめさせ

春が来た来たよと納税申告書

和歌山市 仮 家 和 美

つぎはぎの言葉に白き月凍る

柳の芽何か言いたき青い色

沈丁花十指にぬくき春の髪

しゃぼん玉彩ゆがめつつ風に乘る

大田市 藤 田 軒 太 楼

冗談にからませ釘もさしておき

おちぶれて人の心は結ばれる

旅立ちの背広にこもる母の愛

御用聞気になる噂さも置いて去に

姫路市 前 田 芙 巳 代

視界ゼロ鎖をはめられている文化

爪も切りました女に賭けるものがない

自画像をはずし涙をたしかめる

束の間の鬼になります冷めたき手

八代市 船 木 史 朗

名作になってロマンな町に見え

雨だれが無理心中のように落ち

客あしらい馴れる頃にはバイト済み

ギリギリの線を女は酌で逃げ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

はらんでる蛙をよけて畑を打ち

要らぬ米今年も作る種子をまく

提起しただけで決論人まかせ

庭の隅今は大事な雪であり

東大阪市 坂 東 若 芽

夢があり毎朝髭剃る気の若さ
忘れられても春を忘れず柳の芽
人様ののろけに油さして聞き
雪解けて罪の世界と又なりぬ

藤井寺市 古 結 百 水

ほんとうの齡妻だけが知って居り
断層の想いが硯にはこり溜め
一人だけを想うに春は陽氣過ぎ
札束の汚れた臭いが氣をつかみ

倉敷市 小 野 克 枝

頼られて俺の力が庭をつく
平凡と云う幸せが物足らず
しみじみと顔を見ることない夫婦
落し穴跨いだ運へ感謝する

鳥取市 稲 村 光 枝

箸の向き又も違った夫婦箸
愛される事しか知らぬ女と知り
短所は長所互いに飼育認め合い
マスコット贈ってあげたい運転手

米子市 八 木 千 代

春を待つところに朝の窓を拭く
まだ早い春を素足で踏んでみる

傷痕にふれる話の輪から出る
よい妻になり過ぎたのが口惜しい日

大阪府 小 谷 葉 子

服部十九平氏逝く(二句)

巨星墜つとき十字架の沈黙
兇器にめげず銀杏並木に新芽
過ぎ去りし両手に残る虹の愛
冬眠もしたかる紙幣のくたびれて

大阪府 江 城 功 雄

次兄二月十七日逝く(二句)

神童の過去持つ男の骨の嵩
朱のXを入れて糸図が泣いている
水雨打つ肩は今日を生きる肩

米子市 林 瑞 枝

浮気など出来ぬ男に添うて無事
唄の出る席を電話が呼び戻し
荒れた手を包む手袋して出掛け

大阪府 和 田 痴 亭

老の視野一眼レフにも見失い
交通費要らぬ孫ども連れ歩き
そう言えば俺もすこうしへそ曲り

島根県 小 砂 白 江

煮られても金柑香りを失わず

止めどなく川流るるより外はなし

吹き抜ける風をタンポポ頼りきる

岐阜市 市川 鱈 魚

敷かれてもいいさ女房とためた金

受取人名義で後妻負けていず

磨がかれて石は流れの音を恋い

東大阪市 宮西 弥生

腹いせのつもりか玄関しめる音

別室の花嫁孤独でない姿

腹いせは子供の方に向いていき

小松市 四方天 弘美

カビ臭い日記はたちの詩が活きる

カラーテレビ夕餉の対話奪い去り

小説の模倣の恋で火傷する

島根県 山本文子

置き物のように動かぬ冬の鯉

うっぶんがやけにペダルを踏みつける

口答え上手になって背が伸びる

和歌山市 増田 めぐみ

咲き終えた花を浮かせて風呂に入る

わが道を雲はだまってみつめてる

一人旅雲どこまでもつきまとう

島根県 堀江 芳子

瞳孔を黒く塗ったら見えそうで

お返しに今日は息子の肩を揉む

子沢山無理な出費も春のもの

島根県 堀江 正朗

手を引かれながら行末考える

有線へこちらせわしい日暮れどき

底抜けに明かるい声で妻の愚痴

大阪市 黒田 真砂

白髪一すじ見つけて春の鏡ふせ

食い違う話題疎遠の友が来る

炎えた日を夢に紅葉がふまれてる

守口市 岸本 豊平次

アポロの夢地球の土を踏みたかろう

すらすらと嘘が出て自分を忘れ

左遷とは思えぬ空の青い日日

竹原市 脇本 政己

地にふれて雪あたたかさにくらたえる

野仏にそなえるはなの野に満てり

野良犬にごみ箱まじりつぎへ行く

西宮市 加納 聖司

恰度よいところがして縫いなおし
公務員もっともらしく返事する
出つくした意見座蒲団片づける

尼崎市 中 溪 慶 彦

禁煙をして灰皿を不潔がり
敗戦をなぜ終戦と子に教え
ない袖はふれぬ道理をケチにされ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

酒やめたことを女房が淋しがり
美人だからビッコ殊更痛々し
病院の窓からシャバの灯が青い

和歌山県 ふきあげ 虎 城

苦勞した話だんだん自慢めき
横顔を見詰めてる目に恋がある
下心あって話がかたくなり

河内長野市 森 本 黒 天 子

融通性のうとさ汚職を近づけず
沈丁花雪の重さに堪えしのぎ

出雲市 王 紫

叩こうか撫でよか親の手も迷い
他人の目も一人そこに俺が居た

大和郡山市 中 内 孚 彦

家庭教師の居眠りを起きない
詩作するエネルギー捨て石抱かん

大阪市 奥 川 継 之 助

雪載(の)せたまま貨車はほっとかれ
嫁の背を母が流してつつがなし

神戸市 横 山 孜 孝

人間の弱さ煙草もやめられず
古い日記今日の自分を望んでず

七尾市 松 高 秀 峰

今日の地位新聞配達記事になり
初耳と云う事にして聞き上手

大阪市 藤 田 頂 留 子

のれんさえ出てりゃ売れるよう言われ
さそっても男がはらうと女決め

新潟県 高 野 不 二

風邪ひかぬだけがとりえか子は丈夫
かきまわす役に一番風呂に入れ

東大阪市 落 合 思 月

桂浜石を売る人ひろう人

茶飲み友とはうまい逃げ言葉

羽曳野市 前 川 桂 馬

бата屋の犬わき目もふらず車ひく

試験シーズン過ぎてひろびろと天満宮

東京都 杉山徳三

商魂は絵馬堂にまで来たコマーシャル

金比羅さんにて

五百段頃から下の景色はめ

仙台市 川村映輝

雪だるま昔と異う目鼻だち

謝恩会どころか先生つるしあげ

大阪市 梅園摩耶

わが子をもらいうけるのに判がいり

同じ顔だのによつてよつて写真出し

大阪市 有信新之助

誰にでも優しい天使で気を揉ませ

同床異夢妻の呻きで眼を覚まし

京都府 福村飛龍

理解あるつもり子供はそうとらず

わいろなく役得のない職にいる

岡山県 武元柳子

頭から足の先まで春が来た

ひやかして見て歩くだけ植木市

羽曳野市 飯田一治

留守番でどうしようもなく昼寝する

母となる幸せ乳房二つあり

竹原市 生信笑子

風に髪まかせて春とかけくらべ

Maid in Japan 見えないところへ書き

羽曳野市 榎本吐来

声がわりやっぱり父の子とわかり

四十の坂へクラッチ入れ替える

今治市 米子映月

叱られて埃払いの音が派手

本物のダイヤと見せるしとやかさ

堺市 斎藤亜也

肯定も否定もせず笑っとく齡

キッチンも週番制の共稼ぎ

大阪市 斎藤三十四

初めてのフグにだんないかだんないか

通勤の隣りはマスクかけた人

大阪府 松岡茶々坊

ゲバ棒の記事で三面見る気せず

誕生日祝って故郷の味が着き

松江市 (光春改め) 大峠可動

宿命に笑って耐える顔と知る

灯をつけていいよと夕日傾けり

鳥取県 大山 呆風

春時きの準備カタログよく集め

これでもかこれでもかとコマージュル

愛媛県 澄本 満子

パパ抜きをするかも知れぬ子を育て

不作同士はや銀座を迎えたり

竹原市 森井 菁居

悪夢ああ記憶喪失して見たや

スタイルはみの虫気にせぬ事に決め

鳥根県 志賀 美栄

箕虫の孤独寒波にゆさぶられ

残り陽を吸って布団は丸くなり

鳥根県 梅 みどり

次々と自然のリズムにのって咲き

定期券さかさに出してすべり込み

大阪市 岡本 まさひろ

人事課はペンダコだけを採用し

傘なしで土砂降りバスからほり出され

和歌山市 増田 次章

散ることを知らず花誇らしく咲き
凡夫です予定を明日へのばしたい

尼崎市 中谷 利美

先生とママの話が喰い違い

平等に子を可愛いがる難しさ

竹原市 時 広 一路

ライバルと言うには友の親し過ぎ

聞き上手とはいいいにくい話し好き

大洲市 堀内 曉風

まとまった話横槍から崩れ

案内図から近道を通って見

鳥取市 両川 洋々

数の子も有るには有ったと見て帰り

飼われてる義理から吠えている小犬

仙台市 平野 光道

雪の夜の女湯も一人らしい音

いつまでの不運か埋火かきたでる

今治市 古野 伶人

スタンプを押すまで切手処女のように

人情に負けて帰った野犬狩り

堺市 伏見 茂美

化粧せぬ娘に見せる化粧する
親の無い小猫を抱いて乳温め

鳥取市 藤本 恵子

近道をしてたつもりが行きどまり
読める字のとこだけ見て置く書道展

京都市 藤 本 征 山

考える余地なし社則でしばれる
お得意に酔われからまれ払わされ

鳥取市 藤 本 佳 女

ひとしきり燃えた日もある落紅葉
大臣を憶えた頃にまた変り

芦屋市 丸 川 愁 電子

白バイがバックミラーに追いかける
派手好きだった母のかたみを春に着る

大阪市 福 井 蘭 子

求めては孤独とならぬ日を過ぎ
独り居のめしを野犬に分けてやり

伊丹市 春 日 青 争

枯葉落ちついて庭いっぱい
蒸発が2DKでみつけれ

堺市 藤 井 一 二三

春の陽を吸ったふとんに幸を嗅ぎ
鳥取県 藤 泰 嗣

米子市 源 氏 勝 久

日の丸がだらりと垂れたまま揚がり

大阪府 島 野 大 吉

もう祖父がおもちゃに出来ぬ子に育ち

兵庫県 高 橋 近 江

雪搔でニュースの其の後を聞いてみる

和歌山県 加 納 花 秀

住めば都僻地にうまい空気あり

鳥取市 近 藤 秋 星

大根の持味生かしただけのこと

笠岡市 谷 本 鈍 愚坊

過労から夢の余生裏目なり

高知県 山 川 勝 子

筆不精郵便番号のせいにする

岡山県 浜 口 志 賀 夫

此の胸の疼きを知るや聴診器

倉敷市 河 村 筒 子

歟洗った小川で洗う耕耘機

鳥取市 藤 本 和 宏

踏んで見て動かぬ石と確かめる

兵庫県 不 二 本 和 久

尼僧でもやっぱり女の匂いがし

鳥取市 夏 目 葉 舟

寒釣りにつられて見ている橋の上

鳥取市 山本 珂也 女

草餅を造れば亡母を想い出し

鳥取市 河口 忠志

ウインドの流行だけは見て帰り

鳥取市 藤本 鎮也

人間の知慧が年中菊咲かせ

今治市 原田 輝親

一人逝くのに盛大な葬儀

岡山県 片山 雅子

ささやかな自慢子供の預金帳

岡山県 目賀 芳月

景気よく音痴と下戸が手をたたき

八尾市 香川 酔々

雛かざる寡婦という名がうらめしい

泉佐野市 大工 静子

病人は同じ話をあきもせず

青森県 岩淵 一星

色街に浮世百科のネオンもえ

鳥取市 有田 鹿の子

悪いとこだけがお前に似たと責め

大阪市 西本 保夫

漬物をあげるとヒマな電話かけ

大阪市 田中 多幸

でしゃばりは言うだけ言うてだまりこみ

愛媛県 西田 夫豊

尾を振って迎いに来たのは捨た犬

神戸市 来住 タカ子

愚痴を云う人無く春の風に付つ

尼崎市 平井 露芳

養殖魚ここが大海だと思ひ

石川県 瀬森 利彰

卒業生母校の庭が去り難い

泉佐野市 大工 チヨ

孫来ればチャンネルぐるぐる廻り出し

大阪市 加納 楽々

何時までも子供で居たい春の月

堺市 藤谷 象園

よく見れば神秘ただよう顔のシワ

愛媛県 小田 党山

雨ポロリ山羊は悲劇の声続け

高槻市 山田 スミ子

冬を越す金魚熱帯魚と同居

香川県 西山 綾子

生木裂くように完全看護です

島根県 中 島 英 子
転勤の辞令職場の恋を裂き

岡山県 山 田 止 水
ふり向けば泣き出しそうな背で別れ

和歌山県 吉 野 富 子
金持に銀行金を貸したが

岡山県 川 端 晴 女
生活を運ぶ年輪指に出る

諫早市 原 田 明 春
マージャンへ芽がつくころは朝になり

今治市 渡 辺 南 奉
まだ誰れか稼ぐ音する夜のしじま

松江市 村 松 醉 歩
弔吟も酒の力を借りて出来

大阪市 伊 藤 一 雲
ピラ一つくれぬ日はなしターミナル

大阪市 木 村 濁 水
火事見舞たまに二級も混ってる

大阪市 松 岡 茶々坊
気の合った夫婦仲良くパチンコし

大阪市 今 井 隼 人

路郎忌句会は七月七日(月)午後六時開催

会場は以和貴荘。地方からご出席の方には同会場で宿泊もできますが、早目にお知らせください。

二賞発表と同人総会は十月十二日(日)

同人総会は午後三時から―二賞発表句会は午後六時からです、会場はともに以和貴荘で開催します。

川 柳 塔 社

寒さにはミニ娘もつめたかろ

大阪市 中 谷 はぎの

九谷焼夫婦茶碗も蓋だけ残り

大阪市 鈴 木 生 仏

火事見舞怪我の無いのを喜ばれ

大阪市 大 池 聖 川

卒業の春が来たのにバリケード

大阪市 木 村 久 子

茶柱が立って安茶が喜ばれ

大阪市 田 治 一 登

機械化で茶摘みの唄も消えて行き

大阪市 花 田 繁 子

ご馳走のあとの煎茶に二度の味

大阪市 松 岡 進

み仏にすまぬがご飯上げたまま

近 詠

道連れの話とんでもない事をきき
朝立ちの旅で女は起しに来
大阪市 橋本 緑 雨

ほくそ笑みおさえて掛引だざらせる
須坂市 高峰 柳 児

賽銭の小銭を団体分けて投げ
歳末の吐息おたがい様と逃げ
受話器持ちかえる言いつ分の声とがり

誰服むとなしに減ってる胃腸薬
建設と言つて土方の名をさら
上田市 金子 呑 風

老の足いっそ苦勞な歩道橋

和歌山市 秋月 宏 方

日曜の釣場無人の島も春

蝶々は舞に一生ささげる気

しあわせは底辺少し上に生き

万を越すものを塗つても低い鼻

大洲市 米 沢 曉 明

家出して親の動きを打診する

役人の裏から来いという目つき

女将から重役会の日どり聞く

今治市 月原 宵 明
失対は年中街を掘りかえし

ブリキ屋になんぼでもある草月流
振向けば立っているのでお辞儀する
毒舌の後のコップはからだつた

名古屋市 長谷川 鮮 山
ポケットの或時邪魔になる小銭

空っぽになつた頭にいい夜風
気の合つた二人の仲の青写真
額を文字左から読み恥をかき
今治市 長野 文 庫

割勘をただの気でいる飲める口
ふる里で飲めば二級も別な味
呼び捨てにされて嬉しく故郷で酔い

小松市 山上 千 太 郎
地の中の眠りの動く陽の温み

一輪二輪雪の季節の去り切れず
からくれないの遠い思いの金婚齡

★

座ぶとんに体温のこしてみなかえり
眼をつむつても胸に咲く華にもなし
暇つぶす一日でした梅少し

一矢はなつ歳時記のない自由な詩

川柳徳川記(四)

家康

(三)

富士野鞍馬

長久手・小牧山の戦

天正八年(一五八〇)長男信康は、母(築山殿)と共に、織田・武田の義理にからまれ二股(浜松の西北三里)で自刃した。(信康二十一才)

天正十年(一五八二)家康は、織田信長に挨拶のため、五月、安土城を訪れた。その時の接待役が明智光秀であったが、饗応の肴が腐っていたというので、信長は怒って接待役をやめさせ、中国へ出征を命じた。そして信長は京都へ行った。そこで六月二日本能寺の変となり、信長は光秀に攻められ自刃した。家康は大阪見物をして三河へ帰ったのである。そのころすでに家康は、甲信駿遠三の五か国を領して、強大な勢力になっていた。光秀は羽柴秀吉に敗れ、信長の勢力は秀吉が継承したのである。

天正十二年(一五八四)三月、羽柴秀吉は

信長の次男北畠信雄と戦端を開いた。信雄は家康に助けを乞うたので、家康はそれに応じて、長久手で合戦して、秀吉軍をさんざんに敗走させた。

世に長久手柄を伝ふ御勝利 (一一三)

猿面の生きもをぬく小牧山 (八六二)

小牧山長く久しき御手がら (五七〇)

さるをちらした日の丸の扇胤 (二〇二五)

と川柳に詠まれている。家康の馬標は五本骨の金扇であった。

五本骨末広となるおん印 (七五〇)

この戦で、徳川の四天王井伊直政、榊原康政は、すぐれた軍功があったので、

小牧山一際目立ついい榊 (七一三)

榊より猿の先立つ小牧山 (五九九)

とも詠まれている。

この時家康は、和睦のため、二男秀康を、

秀吉の養子とし、また秀吉の妹旭姫を後妻に迎えたのである。

天正十三年(一五八五)秀吉は「豊臣氏」となり、大阪城が出来た。

天正十四年(一五八六)十月、家康は、秀吉の招きに応じ、京都へ赴き、太政大臣になった秀吉に対し臣礼をとったのである。

江戸入

天正十八年(一五九〇)秀吉は、小田原の北条氏を攻めた。家康もそれに参加して、遂に北条氏を降し、その領地関八州に転封せられ、八月に江戸城に入った。北条氏直の妻は家康の二女小督であった。

武は戈を止る字義の御入国 (四三二六)

— 武蔵 —

前後二回の朝鮮出軍に、家康は参加せず、その間、文禄四年(一五九五)に、秀吉の側室淀君の妹督君を、三男秀忠(二代将軍)の妻に迎え、その娘千姫を、慶長二年(一五九七)に、秀吉の子秀頼の妻に送って親睦を計った。

慶長三年(一五九八)六月、秀吉が死ぬとき、家康と前田利家とに後事を託された。

猿末期犬と寅とに子を託し (二〇一六)

猿の臨終枕辺に寅と犬 (二五三二)

この狂句は、猿は秀吉、犬は利家、寅は家康といったのである。

関ヶ原

秀吉の死後、徳川の威力はますますあがり大阪の豊臣が小さくなってゆくのを憤慨した石田三成は、会津の上杉景勝と同盟して、家康を狭撃しようと計った。

家康は、それを悟り、慶長五年(一六〇〇)七月に、伏見に居たが江戸へ帰って、会津の上杉を征伐し、すぐに東海道を西へ向って、石田三成に対した。九月十五日に美濃の関ヶ原で三成軍と会い、そこで決戦となった。軍勢は両方五分五分であったが、石田方の小早川秀秋が、家康軍へ寝返りしたので、家康の勝となった。

良禽は松が根による関ヶ原 (二〇〇七)
ねがへりをこちへ打た関ヶ原 (九七三)

・川柳塔社常任理事会・

四月四日六時から常任理事会が本社階上で開かれた。

誌代を上げず、ページ数を落とさず、なんとかこの物価高に対処する方法を三カ月越しで協議した。

維持会員制、特別会員制などが議案にのぼった。あくまでも同人制を堅持して特権階級をつくらぬこと、これは大方の願いである。

俗にいう「緑の下の力もち」的なご協力をいただけるとうれしいのだが、こ

御勝利は青野が原を赤く染め (七八三)
毒石を扇で砕く関ヶ原 (二五六三)
松風に石も飛びちる関ヶ原 (五六二五)
御扇子で蛭押へる関ヶ原 (六〇四)
ばんじやくを扇でくたく関ヶ原 (四二三二)
草も木も東へなびく関ヶ原 (五八二)

家康の馬標は、五本骨の金扇であった。

この戦いに、秀忠は兵を率いて中仙道を進んだが、信州上田城で、真田昌幸に阻まれて五日おくれて間に合わなかった。

信濃ほどあつて大軍喰ひとめる (三九三)
大軍を喰ひ留めたのはおしなどの (五二七)
さしもの大軍信濃だけ喰ひとめる (一五九)

これはムシのよすぎる話かも知れない。

家庭的ムードは川柳塔社のキャッチフレーズである。主幹以下、一糸乱れぬ団結を誇ってきただけに、理事会は今回のテーマに慎重を期した。欠席の柴氏など電話でご意見をのべてくださるほどであった。

二賞発表と同人総会は十月十二日の日曜日に来まる。これは例年のように、第一部同人総会、第二部句会。

出席―橋薫風、清水白柳、川村好郎、金井文秋、中島生々庵、菊沢小松園、不二田二三夫諸氏。

―信濃者大飯食い―
一城の上田で道を張りふさぎ (八三二)
―上田紙―
と川柳に詠まれてゐる。

將軍となる

関ヶ原の勝利で、天下は家康のものときまつた。慶長八年(一六〇二)家康は、右大臣征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いた。

越えて慶長十年に、將軍職を三男秀忠に譲り、家康は駿府(静岡)に隠居して大御所といたつた。

代を譲り給ひ麒麟の片相手 (宝二二)



楽しいお買物の夢をおくる

松坂屋の商品券

上野・銀座・静岡・名古屋・大阪の各店
横浜「野沢屋」・および徳島「サカエヤ」
で共通にご使用いただけます ■ 2階
500円券から30,000円券まで8種類



大阪天満橋

松坂屋

電(06)942-2201

問題でない問題

柄井川柳と呉陵軒可有は

同一人物なりや

吉田水車

表題を提起されたのは川維の昭和八年五月号で筆者は湯本白庵氏であったがどういふ方であるかは詳かでない、その頃には今の中堅作家諸兄はまだ幼い頃であつたりなかつたので、どうかとは思つたが参考にでもと誌上を汚すことにした。同一人なりとする論拠のあらましはこうである。

一、柳樽初篇の序文からみて点者即選者川柳その人と断すべき点が多いこと。

二、岡田三面予博士の著書の中にも疑問とされてゐること。

三、可有の別名木綿之助は柳翁の幼名勇之助と合致すること。

これに対し木村半文銭氏が反論を出してゐる即ち

一、歿年の違ふこと。

二、可有の追善會(天明八年七月)から考へると柳翁が生きたがらに追善會を催したことになる。

三、柳樽の序文によく出て来る「川臬」なる敬称を自らに用ゐるのはおかしいこと。

四、可有の別号木綿というのが方々の連(今日の支部とでも申すもの)の中に出てゐること、柳翁がそう方々に属する筈がない。註、これはも一つの問題ではあるが

五、同一人なりとの論拠が序文からの想像に立脚して簡単に解決することは危険である等々から同一人物論には賛成し得ないといふながらもやはり疑問の數々をあげてゐる。(この項は紙面の都合上省く)そこで私見を少しく述べてみたい。

第一歿年の違ふ点は、ゆかりのお寺で過去帳でも調べてみない限り立証の手だてがないので、この点をどう説明すればよいだろうか。柳書の二、三に拠つてみても可有が同一人とする意見は見出せない。ただ高野辰之氏著「江戸文学史」には可有は柳樽の選者と書かれてゐるけれどもこれは編集の意味で前句の選者とは自ら違ふのは勿論である。

初篇の序文はさり気なく認められてゐるが一種の権威的なものが感じられ、序文は簡潔を期する上からこと細かには記してないが勿論刊行に際してはその旨柳翁に伝えて了承を得たものに違ひない、そうでないとしたら柳翁も余程可を信頼してゐたものと思われ。それにしても「川臬の許しを乞うて」と一言書いてあつたら直に氷解したことであらう。

短評川柳として意義付けた、柳翁、可有居士の功績は大である。その可有の人となりか柳翁ほどにも明かでないのは遺憾なことである。因に柳樽の刊行をすすめた版元花屋久次

郎の碑が後年次代の川柳によって建立されてゐることを記して置く。

服部十九平氏を

偲ぶ

藤原秋月

服部十九平氏が急逝された。二月二十六日付けの新聞報道で知り、あまりにも突然のことと信じられないほどだった。報道によれば二月二十二日、自宅近くの国道で自動車事故にあひ、入院中二十五日午前九時十分逝去されたとのこと。新聞を見て驚き早速、隣の浜田久米雄氏へ電話したが氏は岡山市の柳人から既に連絡を受けていたそうで、惜しい人を見失つたものだ、電話で話した次第。

十九平先生との私の初対面は判然と記憶にないが昭和二十八年十二月の山陽新聞読者川柳大会の時だったように思う。十九平氏は氣どつたところがなく頭も低い人で初対面とは思えない気軽に話しかけて下さつた。昔の陸軍大佐(階級を失念したが)であつたそうでお目にかからぬ内は固くて話し難い人だらうかと思つてゐたが氣安く誰れにでも話しかけ、いつも微笑されてゐた。

川柳ますかつと(當時は川柳岡山と称してゐた)の昭和三十七年七月から百花集という一般会員の雑詠の選を行なつておられたが、

選もさることながら選後評も読みごたえがあった。三十七年九月に岡山の商業放送ラジオ山陽の聴取者文芸川柳「台風」十九平氏選に私は投句した。放送当日、近くの市で川柳大会があり出席したところ十九平氏に会い、「君の句を一席にももらった……」と知らせて下さった。

私は当日、聴き漏らしていたので……。その時、投句した句は書き損じたはがきに墨を塗りそれに鉛筆で書いて投句したもので郵便局から遠いので失礼とは思いつつ投句した。十九平氏から墨を塗ってあったはがきだったと笑われ、そのとき失礼をお詫びしたがそんな思いもある。

十九平氏とは県下各地の句会や「ますかつと」誌上などでよく御指導を戴いた。何年前の夏だったかある海水浴場川柳大会のとき海岸のボート屋の近くで十九平氏が作句されていたら、ボート屋に手帳に筆記してのを見られ、税務署員が貸しボートの営業ぶりをメモしているように間違われたといつて披露のときに笑って話しておられたことなどいろいろなことが思い出される。

氏は岡山県遺族連盟事務局長としても活躍され、われわれ戦没者遺家族のためにお世話をして下さっていた。遺族関係の会合が町内の学校であり、その会場へも柳友S氏を同伴して行き柳談を交したこともあった。十九平氏は各地の柳誌で多くの柳人の指導をされ、岡山県同人、池田古心氏、主宰の「かがみ川柳」でも前号の中より佳句短評をされてい

た。私は十九平氏の名句評と老令の古心氏の川柳に対する情熱に惹かれて数年間、投句している。が「かがみ」誌上に限らず川柳塔その他で、もう十九平氏の玉吟が拝見出来ずまた御指導も受けられなくなると思うと淋しく残念に思う。

十九平氏の思い出は、まだまだあるが書きつくすことは出来ない。本当に惜しい人を失ったものだ。岡山県いな川柳塔及び遺族連盟にとっても損失は大である。

心から御冥福を御祈り致します。

おのひきあひ

本多 柳志

◇先頃源田参議院議員がアメリカで「第二次世界大戦に、若し日本に原爆があったら使ったかも知れない」と語った事が、当のアメリカでなくて日本で問題になって、佐藤首相からきつく叱られた。また遂この間は河崎アルゼンチン駐在大使が書物の中で「ピグミーやホッテンロットを除けば、日本人は世界あらゆる人種の中で、最も魅力に欠ける」——と書いたことが、大使として有るまじき言葉で、日本人を侮辱しているというので大使の職務を解任されることになった。

昔池田首相が国会で「貧乏人は麦を喰え」とか「中小企業の一つや二つつぶれたって云々」といった事が、朝野の大問題になってたことがあった。自分の信念をまっ正直にいつて

勿体なくも農林大臣を棒に振った人もあった。どうも日本の政治家は正直にものをいふことが、兎角問題にされるらしいのである。

◇そしてこれらの人達は何れも「あれは私の個人的な意見でして……」と弁解するのである。憲法で保証された言論の自由も、どうも悪条件ではなくて、何か前提がつくものらしい。正直にいつた事が問題にされるということとは、うらを返せばその発言が問題にされないのは、心にもないちゃんぽらんばかりしゃべっているということにはならないか。四月一日の朝日新聞のコラム欄に「四月バカ。年一度位、うそをつかない日をつくろうじやないか、政治家」というのがあった。

正に政治家の一番痛いところを衝いている。そう思って大臣や議員の国会でのやりとりを見てみると、国鉄の値上げ問題にしても、沖繩問題にしても、あの連中のほんとうの腹の中は、一体どうなんだろうかと疑って見たくなるし、国会の質問も答弁も八百長に見えて来てならない。ほんとうに一日位、正直にしゃべっても問題にされない日があつてもよいように思う。

祝賀会心と別な手にぎり

柳志

直原玉青著

創元社出版
価 二千元

「新しい南画と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

姿

三井醉夢選

警官の姿へ無免許廻り道秋月
 姿なき姿へ刑事追いつけ花秀
 日本の姿をなげく戦前派魚山
 母の目に残る離別の子の姿同
 過去現在未来の姿池の蓮初甫
 姿見へまだかと夫の声が眺ね章雅
 荒磯を風の姿に生える松同
 姿見へ二人の笑顔うつす幸曉明
 姿より氣立て優しい娘にひかれ勝子
 姿見に女着付けを下からし清一
 不孝などみじんも見せぬ舞姿宵明
 似姿に昔の恋を想い出し止水
 新調の背広が揃う入社式どなた
 詐欺犯の姿かたちひっかかり与根一
 沈黙の父石仏の姿に似幽谷
 晴姿いま表彰台に立つ水着里風
 学生の姿を替えたヘルメット英子
 前向き姿勢ふり向く暇もなし千翁
 古人形棄てられる日も舞姿光道
 舞扇古稀とは見えぬ立姿輝親
 ブルドーザー故郷の姿切りくずし征山
 急逝の友の姿を目で描き恵二朗

晴姿きょうが最後のアドバイス無聖
 仮縫の針へ不動の姿勢とり利美
 姿だけ遠くから見る片思いタカ子
 定年の後姿は肩が落ち素身郎
 仕事する姿に惚れたプロポーズ保夫
 交通禍むごい姿に泣き伏せる代仕男
 亡き妻の若い姿を娘に見出し一二三
 湯の街へ鼻うごめかす洗浴衣緑
 当選の暁までの低姿勢軒太楼
 年隠す派手な姿で夜を勤め誓二
 反省の姿勉強部屋に灯が克枝
 振り向かぬ後姿に竹ちつくし芳子
 富士山がまだ見えるよと移民船芳仙
 売れっ娘は席へ姿を一寸みせ双楽
 大の字で寝る赤ちゃんへ親の夢南奉
 心より姿に惚れて結婚し七面山
 佳
 年毎に母の姿の小さくなり輝親
 父ひとり娘ひとりの嫁く暗れ姿与根一
 制服の後姿にある女止水
 バリケードまさかと思つた子の姿正朗
 母の目に娘は遜色のない姿清一
 人の
 親の癖後姿にまで貰い止水
 地名も姿のまままで代わり章雅
 天
 ガラス戸の姿も女たしかめる佳女

沈黙

田村藤波選

軸
 シクラメンおどけ姿の春の使者
 思春期の娘の沈黙を計りかね清夢
 弁解もせぬ沈黙に腹が立つ章雅
 国境の沈黙平和な日が暮れる秋月
 酔う程に沈黙少しずつほぐれ魚山
 お見合の沈黙庭をほめはじめ初甫
 喋ったら不利と沈黙眼で合図勝子
 倦怠期沈黙という手をつかい与根一
 負けて勝つための沈黙とも知らず幽谷
 黙ってる地蔵がこわい罪の日に一也
 沈黙の胸に怒りがこみあげる雅子
 沈黙を破る話題がない焦り止水
 沈黙の労資へ流れ星一つ宵明
 沈黙の中で見つけた妥協点里風
 反抗の沈黙ついに蒸発し英子
 沈黙の果ては茶碗を一つ割り春日
 沈黙の議場へ遠い金魚売り輝親
 だまり込む妻へほとほと困り果て忠志
 判る日があるさと沈黙まもるとし貴恵
 沈黙はどっちに似たか子の抗議曉明
 上役の沈黙ときたま合う視線トク子

雄弁が沈黙してゐる深い訳
 沈黙を守って苦い酒にする
 背を向けた儘の二人に夜が長い
 沈黙で満場一致可決され
 沈黙の辛い十代すつと立ち
 沈黙の中で愛情温められ
 沈黙の殻で孤独をあたためる
 せい一杯の沈黙口を閉じたまま
 議場では沈黙酒が出て饒舌
 一瞬の沈黙判決の言い渡し
 収拾がつかず沈黙の時流れ
 沈黙に限ると決めて茶を啜り
 沈黙の父に温みのある仕種
 沈黙を破れば満場水をうち

佳
 沈黙と沈黙腹で対決し
 沈黙の点前茶筌の音が冴え
 沈黙の娘の本心をよそで聞き
 沈黙の苦しさ小石をけて見る
 沈黙へ秒針容赦なく回る

人
 沈黙の外なし物量には勝てず
 沈黙の余情人形の髪を撫で

地
 一触即発沈黙のつづく対峙

天
 糸垂れて瞬時の夢を追う呼吸

軸
 文一
 柳子
 惠二朗
 七面山
 瑞枝
 木魚
 タカ子
 筒子
 豊平次
 秀峰
 光枝
 軒太楼
 文一
 葵水
 白汀
 七面山
 史朗
 千翁
 芳子
 素身郎
 洋々

団 地

小西雄々選

均一の家計に見える団地の灯
 一坪の花壇がほしい団地族
 干し物の色で教える団地の子
 パン売りの驢馬を団地の子が囲み
 御主人の地位が団地にまで及び
 鉄筋の団地の影は角に落ち
 団地今日満艦飾の日曜日
 豆腐屋のラッパ団地の方を向き
 懐しい訛りが団地へ越してくる
 空箱に春の芽ふかす団地窓
 回診の順序団地へきて迷い
 故郷すてて東京弁で住む団地
 団地から団地辞令へ引張られ
 三度目に訪ねて団地まだ迷い
 伝説の塚が跡形なく団地
 お隣りの職もわからぬ団地族
 風にのる風が団地をのぞきに來
 団地の灯ついて鍵っ子父母を待つ
 区切られた団地に家族丸う住み

秋月
 勝子
 鷄江
 初甫
 弘朗
 どんたく
 幽谷
 宵明
 止水
 英子
 筒子
 光道
 千翁
 尚二
 古心
 春日
 佳女
 鎮也
 勝久

けん制を仕合つて団地和を保ち
 新婚の夫婦を団地落着かせ
 団地にも春花が咲き鉢が萌え
 墓地移転させて団地の建つ文化
 候補者のマイクに団地ねらわれる
 夫婦らしからぬ夫婦もいる団地
 同じ窓に個性を競つてゐる団地
 ごみ箱の中まで見栄を張る団地
 住めば都団地団地の役が着き
 楽隠居のぞんだ団地で住み心地
 団地族などマスコミ書き上げる
 近所の目団地へ小さく住むマダム
 マイカーがずも団地の露地を埋め

佳
 先代の汗した土地に建つ団地
 団地から議員も一人だす噂
 去年までお米が実つていた団地
 下着干すのにも団地の虚栄心
 団地には団地としての知恵がいり
 残業へ団地の道は淋しすぎ

人
 宣伝車団地ひっそり無表情
 合理的すぎる団地に老いわびし

地
 団地にも欲しい長屋の人情味

天
 飼犬は友にゆずつた団地の荷

軸
 春日
 弘朗
 幽谷
 与根一
 無聖
 双楽
 代仕男
 可住
 輝親

初歩教室

—— 題 「純」 ——

本田 恵二郎

私のアイデアでこの教室は、毎回違った形式で、皆さんと対話することにする。つまり、バラエティによって、皆さんも、私も共に、楽しく勉強ができると、考えての企てだと、思っています。今月は小句会を開く。

(一席)

純朴なお国訛りのままで老い

芳子

私の老母は、八十七才で健在である。その母をモデルにして頂いたような、近親感をおぼえる。句の底に流れる愛情が、ほのぼのとさせてくれるのであろう。芳子さん好調だよ。

(二席)

純真な眸へ嘘がふとどもり

克枝

けがれを知らぬ、澄みきった眸は、神に通じらるるものを、ほのかにたたえている。何んにもいわなくても、嘘をついている、よごれた口を封じてしまう力を持っている。座五の効果的発見に、努力することだ。

(三席)

血統書つきたいような娘に育ち

一二三

純血種の犬には、血統書がつけてある。こんな良い娘を、犬と一緒にするわけではないがそれがそれ、川柳の面白味である。

(佳吟)

大人の尺度で純情な子を叱り

瑞枝

所謂教育ママが、こんなへまをやっていて、気付かないでいることを皮肉った。

反抗の言葉に純な心読む

光枝

反抗も子の成長の証左である。その反抗を純愛の手で、受けてやれる母でありたい。

純粹犬飼ってやれ忙しやれ忙し

孜孝

純粹犬の健康管理のむつかしさを私も知っている。運動と食事に、毎日気をくばるが、好きでなくてはできないことだ。忙しいと、こぼすなら、止したらどうだと他人様はいうかも知れぬ。叙法の研究に打ち込め。

税務署の言うほど純益あって欲し 政夫
庶民の願いの一つである。純益が無いと表現しないで、あって欲し、で成功した。

純白のドレスをハイミス値ぶみする

保夫
純白のドレスとは花嫁姿である。それを値ぶみする老嬢の心理は、複雑であらう。

(平仮)

純毛が判って欲しい顔で来る

新之助

八十年たった一度の純な愛

静観堂

制服でかくす不純な恋である

光道

純白の白衣に生きたる使命感

誓二

純真を傷けおうてバリケード

正朗

とつ弁に匂う純真さに引かれ

美代

純真さ保ち続けている底辺

軒太楼

純真な子らへポスターどきどきつすぎ

天人

捨て難い味純綿の肌ざわり

綾女

純真な頃もあつたる全学連

秋月

青年の純粹香車のゆくがごと

桂馬

純粹なかけひきなりし好敵手

徹也

純真な過去アルバムに生き続け

芳子

うぶな恋純情すぎてはかどらず

夢亭

キャリアがあるから純真さ疑われ

葵水

純情が聞いて呆れる私生活

利美

器量より純情見込んで添ったはず

比呂路

再婚を不純と悩みふみきれず

富子

週刊誌真似て純潔うたがわれ

輝親

純白のシャツがのぞかす夫婦仲

史朗

純粋な気もちが要らぬ世話をやき

茂美

純真な瞳にあすを支えられ

弘美

純潔を説く先生の方が照れ

肖二

久方を訪えば純良酌いでくれ

近江

純な夢さげて嫁いて来たものを 静子
静子さん、もう一と息の頑張りだ。あせるこ
とはない。淡々と川柳街道を歩き続けよう。

自主流通近くありつく純良米

近江

おいしいご飯をたべたいことは、たれもの望
み、それを句にしたわけだが、自主流通とい
う、最近現われた語を、新聞紙上などから学
びとったことは、川柳人として大切なことで
ある。川柳人は断えず見たり、読んだり、聞
いたりをおこたるわけに参らぬ宿命をもって
いると私はいいたい。それは句材拡張であり
人間の幅を広くする手段である。

私は古典をひもとくと、機ある毎に述べて
いるが、古さを排撃すべきでないということ
は、古さがあってこそ新しさが生れたのだと
いうことを忘れたくないからである。古川柳
を真似るといふ意味ではなく、川柳の古典を



知ることは、川柳人としての教養の一つであ
るという意味である。川柳の道を志すもの
が、川柳の歴史を知らないとは名折れだと思
う。古典をひもといてみるひとときを持って
欲しいものだ。そして前向き姿勢を正さね
ばならない。前向きとは、時代と共に歩くと
いうことだ。それは近代的感覚を身につける
ということである。時代の姿、風習、思想、

言葉、それらの総てを身につけるべく努めな
ければなるまい。それはなかなかむづかしい
ことでもある。かく申す私自身が、四苦八苦
のあぐくれであるが、努力のあぐくれでもあ
る。佳き句を生むためにはその土地を耕し、
豊かな肥料を施さねばならない。その耕し方
や、良質の肥料を選択しあうべく、この教室
で励みあいたいものである。

教室をより良いものに育てるためには、皆

鷺羽山に句碑建立

—— 児島鷺羽ライオンズクラブ ——

鷺羽ライオンズクラブ（石田良一会長、メ
ンバー七十六名）は、創立四周年記念事業と
して、鷺羽山に句碑の建立を計画して、着々と
進めていたが、三月二十二日午後三時から、
各方面の名士等を招いて除幕式を挙行政た。
句は鷺羽川柳会員だつた故難波天童氏作

島一つ土産に欲しい鷺羽山

内海の多島美をみごとに描いた句であるが

さんの希望やアイデアを、投句紙の片隅に書
き添えて頂きたい。句を生むための悩みを書
添えることもよからう。その悩みの解決法を
私は一生懸命に考えてみたい。それは私自身
の勉強でもあると思つてゐる。私が解決法を
見つけ得ない時は、川柳塔社の先輩諸氏の出
馬を求めることさえあるかも知れない。
それは良き作家よ生れよという私の願いが
そうさせるのだ。次回へのご健吟を祈る。

★ 五月二十日締切 七月号発表

題「愛」

六月二十日締切・八月号発表

題「木」（特定の木の名称を用いてもよろ
しい）

宛先—〒711 倉敷市下津井三五二

本 田 恵 二 朗

児島鷺羽ライオンズメンバで鷺羽川柳会長
の本田恵二朗氏が、この句を選んで企画、児
島ライオンズ・メンバで書道家の三宅素峰
氏が染筆した。重量五百貫という立派な庵治
石に、前川信二氏が彫りあげた。事業費は三
十万円。鷺羽山第二展望台より頂上へ向う散
歩道に建立、あわせて風流な道標も寄贈恵二
朗吟、素峰書の次の二句が彫られている。

細道のそよ歩きを島媚むる

波静か島と対話をする小徑

（児島鷺羽L・C広報委員会提供）

大萬川柳

「時刻表」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 七百三十九句
入選 七十八句

西宮 多久志
泊ってゆけと時刻表取りあげろ
大阪 小路

ホームがらあき時刻表交ってた
鳥取 恵子
時刻表見せて母を泊らす気
鳥取 礎山

妻の言う方が合うてた時刻表
和歌山 富子

ストの日の時刻表まで腹が立ち
鳥取 佳女

時刻表上り下りを間違える
大阪 保夫

時刻表おぼえた頃にまた変り
鳥取 貴恵

立読みで頭に入れた時刻表
羽曳野 一治

時刻表と時計見くらべ安堵する
高市 好郎

あきらめの汽笛が違い時刻表
尼崎 徹也

団体はよし幹事まかせの時刻表
時刻表通り団体もうこりた
富田林 きはち

やぶ入りの顔が時刻表見上げ
大阪 柳志

ふるさとの駅が小さい時刻表
日帰りの社用わびしい時刻表
大阪 静波

時刻表乗り換え三分そば二分
米子 千代

客の目には過密ダイヤとは見え
進学と就職同じ時刻表の下
大阪 薫風

子の帰る日の時刻表また覗く
堺 一二三

二年程前のならある時刻表
時刻表も時計も持たぬ旅したや
鳥根 正朗

待ちぼうけ非情に見下す時刻表
岸和田 かつらぎ

結婚のプランに子等の時刻表
ママの帯やっ之間に合う時刻表
米子 瑞枝

行商で暗記している時刻表
出雲 岬月

酔うたらしもう気にしない時刻表
ウナ電に時刻表など言うこれれず
尼崎 利美

酔うたらしもう気にしない時刻表
西宮 百酒

時刻表片手アートの受話機置く
時刻表見てお見舞は腰をすえ
八代 史朗

ウナ電に時刻表など言うこれれず
尼崎 利美

結局は母に合わせた時刻表
時刻表通りに着かぬ子を案じ
大阪 弘生

時刻表見てたら富士を教えられ
豊中 古方

どないしようと思ひ借りも時刻表
守口 笑風

時刻表満員通過と書いてなし
大阪 美房

値上げする前ぶれ時刻表交る
京都 喜由

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

出張に寸暇をつくる時刻表
堺 天笑

時刻表にとらわれ臨急に乗りそび
大阪 鬼遊

見たいとこ破け旅館の時刻表
大洲 暁明

最終に遅れますがと追い出され
笠岡 白梅子

駅弁の楽しさも組む時刻表
奈良 千里

時刻表スリも刑事も見ておらず
倉敷 三林坊

時刻表次のバスまでぐちり合い
東大阪 綾女

時刻表見ながら立飲み落付かず
大阪 一休

時刻表線ってる息子へ助言する
大阪 弓彦

時刻表見ながら立飲み落付かず
倉吉 弘朗

時刻表交って警手落ちつかず
大阪 弓彦

だんだんに欲が出てくる時刻表
大阪 大吉

時刻表見てたら富士を教えられ
豊中 古方

時刻表改札なかなか出でこない
鳥根 芳子

どないしようと思ひ借りも時刻表
守口 笑風

時刻表あてに出来ない雪となり
大阪 水客

時刻表満員通過と書いてなし
大阪 美房

鉛筆は妻のしるしの時刻表
富田林 花梢

値上げする前ぶれ時刻表交る
京都 喜由

頼まれた土産が買えぬ時刻表
富田林 花梢

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表交って警手落ちつかず
宝塚 ゆきを

時刻表通りの列車に野良の昼
駅弁のシミがついている時刻表

岡山 久米雄
時刻表普通列車がやっと見え
駅員に聞いてまた見る時刻表

岐阜 鱗 魚
乗り越しのうかつ深夜の時刻表
気短かがじっとしてない時刻表

笠岡 要 次
息のあるうちに会いたい時刻表
時刻表貼ってかくした壁のしみ
寄せ合った肩がささやく時刻表

桜井 雀 躍 子
あわてもの居て間に合った時刻表
乗り換えのホームが違う時刻表
世話やきにまかしておこう時刻表

鳥取 洋 々
時刻表枕に寝ては飲んで旅
時刻表安い旅館をまださがし
時刻表めくる隣も一人旅

米子 千 代
時刻表持ち道連れに頼られる
守口 笑 風
幹事だけ確かめている時刻表

岐阜 鱗 魚
母一人東京へ着く時刻表
もう一本ある筈と見る時刻表

大阪 水 客
時刻表と対話無口の旅でよし

時刻表と対話無口の旅でよし

人ノ句	大阪 美 房	十八 曉 明	四、五
時刻表見上げて家出まだ迷い		十九 秋 月	四、〇
地ノ句	大阪 滋 雀	二〇 虎 城	四、〇
新ダイヤいつもの顔と合う安堵		二一 雀 躍 子	四、〇
天ノ句	倉敷 克 枝	二二 形 水	四、〇
時刻表に女の運をかけて付ち		二三 蕪 風	四、〇
選者吟		二四 滋 雀	四、〇
駆け足で名所を廻る時刻表		二五 きはち	四、〇
		二六 好 郎	四、〇
		二七 小松園	四、〇

大萬川柳四十四年度第四回
ベストテン(四月現在)

米子の二名花

今月のNO・1が八木千代さん、NO・5が林瑞枝さん。ともに米子市の奥様柳人で、しかもご近所どうして仲よしとある。雑詠の部でも注目されてはいるし、ご本人らよりファンのほうがやかましい。
大阪でも千代さんと瑞枝さんの人気は大したものである。この人たちのように、意識するしないは別にライバル同士であることは恵ぐまれているとおもう。お二人の句が上達するゆえんはここにあらうようである。(F)

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

大洲 昭和四十四年 第六回
岡山 「野良犬」五句以内
和歌山 締切 五月二十日
桜井 第七回
大阪 「横顔」五句以内
大阪 六月二十日
富田林 投句先
高石 大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六
大阪 郵便番号 五九二
川村好郎

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。
(橋高薫風・担当)

▼中島生々庵主幹はこのたび南区医師会長を勇退され、大阪府内科小児科医会々長に就任された。

▼麻生霞乃先生は病氣全快されて四月七日には元不朽洞の仏前へ参拝された。

「雀チヨンチヨン朝の序曲の生駒町」雀の鳴く声は私にはいくら耳をすましてもチヨンチヨンと聞えるのですとお便りを頂戴した。

▼北川春巢氏(大阪府参事)は四月一日、大阪市立桃山病院長、桃山市民病院長兼任に栄転された。お慶び申し上げます。

▼第二十回新潟県川柳大会は昭和四十四年六月二十九日(日)午前九時半から新津市本町四丁目割葉新森大

川上三太郎川柳展が開かれる。

▼川柳おもいで吟社では柳書刊行部が復活になり、竹田花川洞句集「隅田川」などが上梓された。

▼木幡村雲壽祝賀句碑建立記念句会は四月六日野崎観音で開催、本社を代表して清水白柳氏が祝辞を述べられた。菊沢小松園、羽原静歩の諸氏と薫風が出席した。句碑の句は、「凡人の

幸せ明日をうたがわず」昭和四十三年度宮城野賞は、同人の部で村上泰なよさんが、「直立不動遺影の軍靴ぬがせたい」など五句で、会員の部で星仙平氏が

「劇薬を乗せて秤の針震う」など五句で受賞された。

▼第三回冬眠子賞には小樽市の東田和子さんが、「裏道を歩けば金のいる世相」など五句で受賞、二位には小坂龍笑氏、三位に嘉瀬信彦氏が選ばれた。

▼一九六九年度川柳ジャーナル総会は前夜祭が五月十七日(土)午後一時から京都市の碧光園で、総会は翌十八日(日)午前十時から開催され、青蓮院、将軍塚御園などの観光がおりこまれている。前夜祭宿泊のむきは予め京都市南区西河辺町宮田あきら宛連絡のこと。

▼道南川柳大会は八月三日(日)午前十一時から伊達町公民館で開催、兼題は、

温かい、各題三句、投句は百円封入の上七月五日までに北海道有珠郡伊達町字舟岡一四四木村義文宛。

▼北海道川柳大会は九月十四日(日)午前十一時から室蘭市海岸町産業会館で開催、兼題は、相談・港・童心・道・聖書・鉄、各題三句、投句は二百円封入の上七月末日までに室蘭市東町三丁目二七太平住宅本田大柳宛。

▼大萬川柳第十六回大会句集が大萬川柳会から発行に

なつた。

▼南陽市芸文協登足祝賀川柳書の集いは三月二十一日(祭)午前九時半から吉堅地区公民館で開催。

▼水谷竹莊氏(大阪同人)は全電通文化の柳壇を故川上三太郎氏のおと選者と決定。ほかに柳連の課題吟の選者にも推選された。

▼番傘川柳北斗会編集部から、誌友、交換柳社などの住所録が刊行された。

▼備前川柳社弥生例会は三月十五日浜田久米雄居で開催。

▼一杯水川柳句会(下関市)は三月二十三日久米雄・正州・一声・浄美歓迎句会として開催、一行は地元の桜川不水氏宅を訪問、中村九呂平氏の宅で一泊、句会のほか市内観光など早春の両日を楽しみ、国弘半休、石川侃流河氏らと旧交を温められた。

▼清水白柳氏(大阪府理事)は「番傘」三月号の特集「

秀吟抄を批判する」を執筆された。

▼本田恵二郎氏(倉敷市参事)の属する鷺羽ライオンスクラブの肝入りで、故難波天童氏の句、「島一つ土産に欲しい鷺羽山」の句碑が、最も眺望のすぐれた所に建立された。この散歩道への案内に恵二郎氏の句、「波静か島と対話をする小径」「細道のそでろ歩きへ島媚びる」が立てられ道行く人を楽しませている。

▼木村涼人氏(青森県同人)は青森県川柳社事務局の運営委員のうち、編集委員を担当されることになった。

▼平野青夜氏(札幌市)は七十五才の誕生日の三月四日札幌川柳社の同人に推薦

されたが、柳歴七十三年の記念日にも当るので二重の喜びであると、今後の精選を誓っておられる。

▼山田季賛氏(高槻市同人)は三月十三、十四日の両日山陽新幹線吉井橋梁工事を見学、ついでに岡山の後楽園を見物された。三月三十日には橋本言也氏宅を訪問

された。

▼岡田拳法氏(香川県同人)は退院をしてやがて一年になるが冬季は風邪をひきやすく春のおとずれとともにようやく元気になられた。

▼垂井葵水氏(和歌山同人)は朝日新聞和歌山版の柳壇選者になられた―青空に突如矢車まわり出し―葵水。

▼若柳潮花氏(高槻同人)は日曜日以外は午後から舞いの稽古があるので、句会に出席されないのが残念。

▼奴田原紅雨氏(室戸市同人)は、岬の東寺から故十九平氏に電話されたころを思いだし、もう会えないことを残念がっておられる―忘れよと鳴るか岬の風に打ち―紅雨。

▼柳都句集二十周年記念が同社から発行された。本社関係の参加は章雅、薫風両氏。発行所―新潟県新潟市本町・柳都川柳社・五百

は故十九平と川雑時代から

新同人紹介

竹 中 肖 二

―白柳・柳宏子推薦

竹 中 綾 女

―白柳・栄推薦

句を競い合う楽しさまで課題吟にまで熱中されたが、十九平氏の逝去と共に課題吟からおりると声明された。過去二十年の楽しかった思い出に感無量とのこと。よい課題吟は脱落しても、初歩教室に全力を打ちこむと力強い書信があった。

▼堺・若芽合同川柳句会。日時、五月十三日、午後六時。題「応援」「流行」「未練」堺靖国会館・金蓮寺。

▼本多柳志氏(大阪同人)の二女伶子さん(守口一中勤務)は守口三中勤務の上山教諭と三月二十九日結婚。大阪共済会館で披露宴をされた。

▼柳都句集二十周年記念が同社から発行された。本社関係の参加は章雅、薫風両氏。発行所―新潟県新潟市本町・柳都川柳社・五百

は故十九平と川雑時代から



タケダ

14

疲勞
肩こり
神経痛
食欲不振

アリヤモナ

本社 四月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

四月と五月の句会は季節に負けるのだが、例月なみの出席率でまあまあというところ。たけはら川柳会のホープ小島蘭幸さんが遠来の珍客として大うけである。

席題選者のイメージをやぶって、大物にご出馬ねがった。ここいらが川柳塔の家族的強みというのであろうか。

戸田古方氏の柳話はお得意の歴史物。黒板の手さばきなど教室そのままである。月間賞は藤岡花梢さんに輝やく。(F)

(河井庸佑整理)

出席―古方・双葉・与呂志・庸佑・蘭幸・白柳・新之助・柳宏子・一三夫・大吉・静馬・文秋・柳志・武助・形水・一栄・葛城・瓢太・静歩・滋雀・花梢・喜風・美代・儀一・照一・凡九郎・天笑・肖二・いさむ・小路・綾女・生々庵・一舟・鶴声・美巳代・奈良子・つき子・トメ子・酔々・青滋・金三・凡吉・季賛・吸江・多久志・六龍子・静波・鬼遊

・天樹・誓二・富久一・好郎・一扇・頂留子
・栞・宣介・千梢・小松園・功雄・万的・弓彦・葉子(前月季賛氏出席)

席題「鳩」

岡橋宣介選

鳩に豆四五粒撒いて店じまい 静馬
豆を売る老婆へ鳩の目がやさし 一三夫
鳩の数開会式を盛りたたせ 吸江
鳩平和養もしずかに落しやはり 凡九郎
鳩の養仁王の門がひきうける 喜風
菓作りの鳩立退きをまだ知らず いさむ
駅の鳩電車が出ると降りて来る 綾女
鳩の目を持ち昨日を裏返す 美巳代
法善寺で別れ話を鳩も聞き 美代
国宝の庇で鳩の子が育ち 柳志
少年の涙鳩よ帰って来ておくれ 蘭幸
ご好意にあまえ本願寺の鳩の糞 生々庵
宮参り嬉しい鳩に見下され 柳志
鳩を抱くしか愛のない女 照一
宮詣り氏神様の鳩を抜け 金三
その中に足を痛めた鳩一羽 千梢
鳩が知っている餌を呉れる子 与呂志
よちよちを鳩もよちよち逃げまわり 静馬
くす玉が割れて鳩もうれしそう 凡九郎
重文も国宝もなし鳩の糞 栞
大吉と出たので鳩に餌をはずみ 美代
分校の理科は蚕も鳩も飼い 柳志
鳩のなきごえに関係のないふたり 宣介

席題「カロリー」

菊沢小松園選

その仕事カロリー表をくるわせる 千梢
カロリーに関係はなし腹がへり 白柳
カロリーが俺に合わない味造る 凡九郎
カロリーは他人の倍ほど摂ってやせ 天笑
スポーツマンカロリー隅まで渡り 金三
カロリーへ無理な野菜を食べさせ 一栄
カロリーをいばいつめた市場籠 六龍子
カロリーがどうのこうのとやせて 一三夫
おふくろの味カロリーは知らぬまま 綾女
栄養士の妻でカロリーうるさすぎ 庸佑
カロリーはどうあろうとも嫌いな 庸佑
市場かごカロリーよりも値を選び 鬼遊
カロリーが脚にだけつく娘のなげき 富久一
カロリーは知らず土工の厚い胸 一三夫
カロリーにかかわりもなくよく太り 季賛
カロリーに直して妻が食べさせる 弓彦
カロリーは育ち盛りに物足らず 頂留子
カロリーと別手料理をほめてやる 小路
食べ盛りカロリーなんか言うとれず 美代
カロリーは知らず昔の人は生き 肖二
カロリーにうるさいおやじ肥え 静馬
食べ残すのにカロリーを考え 白柳
カロリーもかまわずよく食べ 柳宏子
カロリー表お腹の虫はすねて見せ 生々庵
テレビママまたカロリーのまずい膳 綾女
腹一杯食べてカロリー批判せず 一三夫
肖二

カロリーを計算された味気なさ
カロリーに済まぬ給食喰べ残し
家庭ではカロリー言わぬ栄養士
カロリーがあつて鰯の日がつつき
柳志

席題「仮病」

西尾

栞選

仮病まで使ったデート断わられ
仮病の子叱ればほんとに熱を出す
何が気に入らぬか仮病降りて来ず
真に迫つて可笑しいよ仮病
見えずいた仮病でまかれた政治記者
恋病いもやはり仮病のようにみえ
ネオンつく頃に仮病は起きてくる
だまされてやる春眠とタイトルで
ずる休み課長が見舞に來てあわて
仮病つこたら罰があたつて來たら
仮病仮病今の世相をそうみまし
仮病でも医師は注射を打つてくれ
仮病でもいいさ年頃に負けてやる
仮病からほんとの風邪を引いちまい
応援の仮病をテレビちゃんと撮り
お花見を聞いてあわてて來た仮病
子なし妻仮病で愛をたしかめる
新婚の仮病さもあらんさもあらん
仮病とも知らず丁重なる電話
サンングラスマスク仮病が外へ出る
その仮病恋人だけが真に受ける
徹夜組仮病の理由みな違い

一扇
小路
奈良子
柳志
つき子
大吉
小路
白柳
武助
凡九郎
花梢
芙巳代
肖二
古方
凡九郎
トメ子
小路
千梢
醉々
富久一
一舟
静歩
小路
文秋
一三天
吸江

すきやきの匂いへ仮病は起き上り
言訳けが余計に仮病らしくする
跳び石を本当に病んで寝てしま
休んだらみんな仮病にしてしま
仮病までつかつて人生あざむく気
仮病どうし初発電車へ竿をさげ
出來すぎていと仮病が勘ぐられ
見舞つたら水菜やとビール飲んで
母の手が仮病の額へ温かし
ええ具合に香港風邪が流行し

兼題「覗く」

西田柳宏子選

否定して見たが心を覗かれる
垣根越し隣のくらし覗く梅
青写真妻も一緒に覗きこみ
覗かれる女女らしゅうなり
世間体ちよつと覗いて見たくなり
黒い川市政のあらを覗かせる
不用意にあげた財布へ彼女の目
伝説の奥は覗けぬシメを張り
覗かれているのを意識するポーズ
覗かれているとも知らぬつまみ食
春うらら世は逆かさまの股覗き
未亡人心とさして覗かせず
赤裸々になれないさかい覗かれる
ふあいんだー覗き昭和の世のヒズミ
覗く気はないが陸橋部屋が見え
肝心なとこで節穴換えさされ

美代
白柳
新之助
庸佑
千梢
多久志
天笑
頂留子
柳宏子
栞
章雅
祥月
正朗
花秀
芳子
柳志
天梢
金三
生々庵
醉々
滋雀
綾女
凡九郎
六龍子
文秋
小松園

覗かれていたプライドを描きかえる
どおねずみ要心の鼻覗いてる
花活ける心を花に覗かれる
覗いたら十円だけの海が見え
井戸のぞく深さではない消える僕
微笑した女に隙を覗かれる
覗かれる心の窓をとぎしかね
商談へチラリ札束覗かせる
教養を言葉の端に覗かせる
貧しさを覗かれまいと閉めるなり
関係ないから覗いてみたくなり
越してきた当座近所に覗かれる
覗かれているなと思うタバコ吸う
あいているからのぞきとマンホール
覗かれた算盤も一度やり直す
展望鏡わが家の方へむけて見る
おいと呼ぶ声に愛情覗かせる
眼帯はずして分厚い封書覗いて見
この家の生活を覗きに來たネズミ
いたずらをした子が覗く曲り角
カギ穴をのぞく獣心さからわず
妥協する心が覗くかえり道
春の宵悪魔の心覗かせる

兼題「首」

本多柳志選

總會で社長も首を寒くなで
首だけを出して湯加減歌になり
合理化に機械と首と入れ替り

照一
儀一
花梢
静歩
天樹
いさむ
百水
儀一
肖二
鬼遊
千馬
静幸
蘭佑
庸佑
虎遊
鬼城
花梢
万的
六龍子
武助
天樹
花梢
柳宏子
まさひろ
芳子
千万子

延ばすだけ首を延ばして糠袋
 首ったけ愛の言葉を書きたがり
 妻も子もあろうに首を賭けたがり
 横に振る首へ対策練り直し
 鶴首して待つと速達料を添え
 うなだれた首を小言が通り越し
 首の差で勝って人生狂いだし
 たくましい首に軽々金メダル
 貸付がうなずくまでの首を垂れ
 首を振ることも覚えて知恵が付き
 バックミラー首でも締める顔に見え
 細首へ扶養家族がぶら下り
 モーニング首から下をからかわれ
 首筋も剃ってデートに夢があり
 上げかえた首だが社運パッとせず
 ホステスもプライドがあり首をふる
 首だけを出してトルコにある疲れ
 うなだれたままで涙にたえている
 虚無憎の首尺八に支えられ
 親しみを盛った返盃首で受け
 修復の名で仏像の首を継ぎ
 麦わりに差した首にも美女をより
 一票へこんな首でも会釈され
 連獅子の首は華麗に振りつづけ
 式挙げて猪首だったのに気付き
 首白く塗るクセ女に過去があり
 がん首を揃えて子分詫びを入れ
 縦にふる首は事務所へ持って来ず

花村 虎城 葵水 公輔 章雅 あいき 凡吉 新之助 好郎 文秋 大吉 鬼遊 武助 多志 一三夫 千梢 凡吉 花梢 笑痴 新之助 白柳 一栄 一栄 奈良子 弓彦 一三夫 生々庵 凡九郎

合併は目出度し首の座にすわり
 合併が不調で首にならず済み
 唄うより唸る小唄の首をふり
 首だけの人形みごとわろてます
 僕的首こんな値段でやめさされ
 首の座を守り通して平で去り
 すぐ替える首で宴会忙しい
 重要参考人カメラの列へ首を垂れ

瓢太 肖二 柳宏子 天樹 天笑 葛城 新之助 柳志

兼題「イメージ」 大坂形水選

失恋のイメージチェンジとは知らず
 学生のイメージチェンジ棒を振り
 イメージは無限に空を駆け回わり
 作家老い古いイメージばかり追い
 ふりむくはないイメージの貌つくる
 イメージチェンジしても妻が居る
 雪洞のイメージ明治は遠くなり
 ペンフレンドの意外に老顔に逢い
 イメージを変えた女優へ主演賞
 イメージをくずす秘密へ振りむかず
 イメージとちがったとこに青い鳥
 イメージをブルドガーが消え行く
 イメージの故里ダムの下に生き
 イメージはマドロスパイプ手放さず
 イメージとは逆に話のわかる人
 ひたむきな恋かイメージかえさせず
 イメージの通り絵筆が走らない
 イメージのふくらむ月日ペンの友

つき子 一三夫 柳宏子 文秋 天樹 与呂志 一三夫 柳宏子 綾女 奈良子 古方 静歩 笑痴 花秀 虎城 庸佑 奈良子

配役がイメージこわしたメロドラマ
 今度は誰のためのイメージチェンジ
 イメージの師の掌は温し目をつむる
 フラダンス仕込んでイメージ売るもり
 イメージをこわしてタバコ吸う女
 イメージを変えてダンパの去った村
 イメージを覚えてダンパの去った村
 年齢いたばかりにイメージが崩れ
 ハイミスの悔イメージがきれ過ぎ
 大阪のイメージ市電の語り草
 イメージは母の像なる下宿の灯
 山の湯のイメージこわすホテル建ち
 イメージと違う本物やってくる
 声だけのイメージバラをささげたし

瓢太 新之助 富久一 静馬 蘭幸 天笑 静波 多志 一三夫 六龍子 白馬 天樹



味の伝統 かれた磨

可子茶司

幡屋八鶴

本 店・大 阪 市 東 区 今 橋 5 ・電 話 (203) 7281
 東 京 店・東 京 都 千 代 田 区 麹 町 2 ・電 話 (261) 3996
 売 店・各 百 貨 店 の れ ん 街

エリートコース路頭に迷う大学生 祥月
オーエスケール川柳会 大坂形水報

整形後のコンパクト開く楽しさ 美露
コンパクト肌身はなさぬ齡になり 智也
妹の鏡まぶしく陽がそそぐ 亜成
正月は公害もなく天の川 健坊
公書の空だんだんと重くなり 孝夫
アベックで歩けばスモッグもきれい 田一
春日永猫と一緒に背のびをし 神扇
鏡からはみだしそうなり 夢田
風邪でない工場街に住むマスク 形一
サイレンを遠く聞いてる春の雪 入形
工場誘致排水で稲が枯れ 白柳

備前川柳社

目賀芳月報

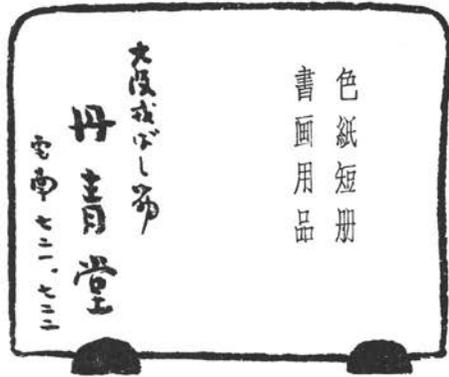
元日の心を筆にととのえる 鈴ん坊
元日の汽笛今年が動きだし 秋声
言いかけた小言をやめるお元日 一照
元日は明るさ一ぱいパパがいる 正女
元日の朝の気持ちをお元日 万州
御近所の音みな寝てるお元日 芳月
モンペを脱いで女房のお元日 芳月
元日の晴着は母の手を借りる 伊久野
元日の夢へ今年の運をかけ 美与子
元日のデートは少しあらたまり 柳五郎
元日に春一番の風をひき 千秋
元日の床掛軸を富士に替え 胡風
元日は富士の山から明けて行き 水浄
お元日年玉ねだる孫が来る 久米雄
変な夢見たのは首を振って消し 柳仙
誕生日祝ってくれる女が出来 幸柳
口説く身の女さくべしい雪景色 三幸報
和歌山短詩型文学クラブ 泰子
都会の子ひなたに出てもすぐかけり

昼帰る子供に曜日思い出し 幸子
育児書と姑にママは板ばさみ 智恵女
昼も訪い夜も誘い話まらさず 佐和子
重なりし日記と共に育ちし子 五月
妻への言訳に伝票持つて出る 純治
育つ程子は女房の親方をし 繁和
子が育つ皺寄せすぐに親方来る 一治
昼は寝て夜中に吠えるスピッツの仔 健光
噛ることのみ吾れに似て子の育ち 公光
伝票です合計だけをちらと見て 智水庵
ありそうな方へ伝票持つて出る 公光
育つて恋を動悸に教えられ 葵水
コンピニーターとんでもない夢育ち 次章
乳母車錆びついている子が育ち 水章
八人も育ち傍に誰も居ず 城石
昼すぎから予想の狂う気象台 三幸

高知川柳社(高知市)

川竹松風報

安心を神に求めている聖歌 寛山
安心をさせてもらったお口添え 白甫
どちらでも良い満足な子が生れ 白甫
安心はまだ早過ぎる後遺症 白甫
安心をさして詐欺師の口車 白甫
安心をして付添いが眠くなり 香芳
母連者安心をして共稼ぎ 勝かし
安心をさせて裏では策をねり 柳水
百万の祈り甲斐なく命消え 運幸
たすからぬ命我が家で死なせたい 窓花
深呼吸して赤たしかめる 伊津志
胎動へ妻は赤い服を編む 松重
限界をさまよって来た命 松重
電線が命をねらう奴だこ 忠童
素裸へコトツ音の音がする 美知
微笑んで死んだ男にない日記 紅雨



夜を稼ぐ生活のなかで娘を思い 桂風
夜音へ身構えてみる夜のひとり 松風
いずも川柳会 尼緑之助報
階段で一と息ついた飲み疲れ 代仕男
二段式階段余生の青写真 軒太楼
剥製にこりて電建の暮を借り 新雪
階段にこりて電建の暮を借り 軒太楼
貧乏も階段がある金し向き 新人
ライバルも中段で男としての酒 壯人
迷惑がついて廻った拾い物 白楊
政局をゆさぶる旗は赤でよし 独歩
政局の波に浮く人沈む人 孤呂二
ゆつくりしてて保母さんの目にむり 湖琴
ライバルももう薄らいで慾も出ず 夢朗
賛成はゆつくり顔ぶれ見てのこと 清夢
政局は動くとき見たか花輪来る

岡田 甫 著

川柳絵本柳樽

古句研究の権威、岡田甫氏の新著が東京都千代田区
神田神保町二の七芳賀書店から発刊になった。

江戸時代の川柳漫画を楽しみながら句を味える川柳
研究書で、豊富な写真版により江戸風俗もうかがえ
変体仮名の習得にも役立つもの。

四六版三五〇頁 箱入 定価 千五百円。

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「虚 栄」 出原 真奇 選

「ハンケチ」 西出 一栄 選

「石 罅」 弘津 柳慶 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「転 動」 藤井 春日 選

「野 心」 松岡 委滄浪 選

「折り目」 上田 翠光 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社五月句会

日時 五月六日(火) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題	柳 話	清 水 柳
席題	「ハンサム」 「年 影」 「近 道」	本多 清人 柳 橋高 薫風 選 高橋 操子 選 市場 没食子 選
会費	二百円	各題三句

★投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川 柳 塔 社
電話大阪03985番

6月の兼題 「おもわく」「天気予報」
「女性上位」「ナイフ」

定価 百四十円(送料六円)

半年分 八百七十円(送料共)
一年分 千六百八十円(送料負担)
昭和四十四年 四月二十五日印刷
昭和四十四年 五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
發行所 **川 柳 塔 社**

電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

「ヒヤク」は

この朝鮮人蔘の



有効成分をぎゅくり

カプセルにつめた

現代人の薬です

朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

・ペンペン草・

★改題いらい三年何か月めに、二日発送という汚点？をしるしてしまっ
★表面はおだやかに見える葉子さんが「こんなことはじめてデスね」と口惜しがる。

★印刷所のゴタゴタのどぼっちりがこっちへ来たわけである。仕事というものは遅いときは悪いと相場がきまっているだけにやりきれない。

★たけはら川柳会の蘭幸さんと不朽さんが二、三日前後して編集部を訪ねてください。こんなとき葉子さんがボクのそばにいてくれるので大助りである。彼女の名ホステスぶりは来訪者に好感をあたえているようだ。

★本号で、チョッピリ借りを返えせたが、まだまだ未発表の原稿が山積まれている。

★自分の句をよくとってくれる選者は名選者ということになっているが、二賞の中間発表は二月号

から本号までの四か月間を近くお届けする。

★ボクの関係している放送が毎朝九時三十五分から始まるので、放送局にはわるいがほとんど聞いたことがない。ところがあるOLが、毎朝九時三十分電話でボクを起こしてくれなくなった。

た。ベルが六回鳴ったらプツツと切ってくれるから、先方さんも料金を払わなくてすむわけだ。近頃の娘さんはいいアタマをしているとおもった。

★しかし、ここにこまったことが起った。ほんとに急用の電話があったとき、受話器をとれば、料金が彼女の自弁になるので、うっちゃらかしておいたため、エライご迷惑をかけてしまったことである。そんなわけで朝の九時半ごろの電話は失礼あり勝ちというところでカンペン願います。

★季節がよくないと句が作れなくなる。ご自愛の程を。

(不二田一三夫)

純良医薬



第一製薬

うちみ・肩こりに

ペタンと貼るだけ!

〈新型パップ剤〉

パテックス

● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入



3,000円以下で買えます—充電式!

CADNICA®



SANYO
三洋電機株式会社

●SV-1000 ¥2,980

サンヨーカドニカカミソリ

エツカ

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

誇る
海岸美を
風光明媚な

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年四月十五日 印刷
昭和四十四年五月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 五月号

定価 百四十円 (送料六円)